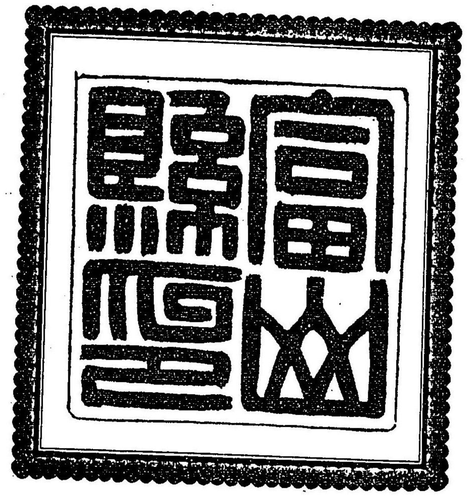
特70
56

富山縣編纂

越中史料

卷之一

富山縣藏版



緒言

一本編纂は、皇太子殿下の行啓に際し、特に記念事業として、所管越中國に關する舊章新載を輯錄し、以て永く後昆に傳へ温故知新の一端に供せむかため、之を企てたるものなり、

一本編纂を分ちて二種とす、一は編年體に史料を排次し、題して越中史料と曰ふ、一は通俗的に地理・沿革・名所・舊蹟・現勢を略叙し、題して富山縣紀要と曰ふ、

一本編纂は、明治四十年十二月を以て始め、同四十二年三月を以て之を終へたるものなり、

一本編纂に關し、侯爵前田家伯爵前田家及ひ縣内有志諸氏は古書記錄類を供せられ、各種官衙竝に管下諸學校は調査報

告の勞を取られ、加ふるに東京帝國大學文科大學史料編纂掛も亦幾多の資料を給せられたり、是れ深く感謝する所なり、

一越中史料の監修校閲は特に東京帝國大學文科大學教授文學博士三上參次氏、學習院教授兼東京帝國大學文科大學助教授岡田正之氏を煩はし、校訂は文學士澤邊復正氏に委囑し、印刷上の事は東京帝國大學文科大學史料編纂掛囑託文學士渡邊世祐氏の力を借れるもの多し、玆に書して感謝の意を表す、

一本編纂は正五位勳四等川上親晴氏、正五位勳五等宇佐美勝夫氏、本縣知事として相繼きて之を監理し、編纂評議員を設け、編纂委員を置き、各其任に當らしめ、又編纂主事及編纂書

記を命して庶務を取らしめたり、編纂評議員以下、前後多少の異動なきにあらずと雖、創始以來此に關係せしものの人名を列擧すれは左の如し、

編纂評議員	富山縣事務官　永井金次郎
編纂評議員	富山縣事務官　山村辨之助
編纂評議員	富山縣事務官　伊東喜八郎
編纂評議員	富山縣會議員　大橋十右衛門
編纂評議員	富山縣會議員　島莊次
編纂評議員	富山縣立富山中學校教諭　黑河内與四郎
編纂評議員	富山縣立富山中學校教諭　小杉熙
編纂評議員	富山縣師範學校教諭　木下福七
編纂評議員	高岡市高岡高等小學校長　篠島久太郎

編纂評議員　建美昌保
編纂評議員　西田鋭吉
編纂評議員　小塚義太郎
編纂評議員　井上忠雄
編纂委員　鶴見立吉
編纂委員　石場健夫
編纂委員　富山縣師範學校教諭　森田宗太郎
編纂委員　富山縣屬　國澤彌吉
編纂主事　富山縣屬　加藤敬次郎
編纂書記　富山縣屬　五艘三郎

明治四十二年三月

富山縣

越中史料凡例

一本書は、明治四十一年一月着手し、同年十二月脱稿したるものにして、太古より明治四十年に至る越中に關する史料を集めたるものなり、但し參考として同四十一年の事をも附載したるものなきにあらず、

一編次の體は、事を以て日に係け、日の明ならざるは月に係け、月の詳ならざるは年に係け、年の無きものは天皇に係けたり、但し事の數月數日に渉るもの、又は同一性質の事件は、便宜合叙したるもの少からず、而して每條の首に綱文を置き、以て事實の大要を提擧せり、

一恒例の事件は、一二採錄したるものあれとも概ね省略に從ふ、要するに記事の大なる關係なきは、或は始めを略したるものあり、或は終を略したるものあり、必しも首尾貫徹せざるものとす、

一紀元、年號、干支、月の正閏等は、內務省地理局編纂の三正綜覽に據り、明治三十七年以後は現行曆に從ふ、

一介據目等の補任は、多く其前後の任國司の條に連收し、又必しも一々綱文に揭

書せず、

一綱文の人名は、概ね最終の稱を用ゆ、又加賀富山兩藩主は終始前田と書し、松平の稱を取らず、

一參考の欄は、主として本條の參照に資すべき材料を收む、時に異說及ひ事實の稍疑ふべきものをも存錄せり、

一卷末に補遺を設き遺脫の材料を彙收す、

一本書は、一地方に精にして他地方に粗なる虞あり、是れ今回蒐集したる材料の多寡に因ることなれば、勢止むを得さるに出つ、又舊藩時代に於て加賀富山兩藩に共通なるへしと思はるゝ事實も、確徵なきものは之を其藩にのみ係けたり、其他これに準し敢て臆測をなさず、又本縣廳として當然調査し得へきものも、猶且其調査を遂くるを得さる事件少からず、是れ本縣は不幸にして明治三十二年類燒の災に罹り、書類多く燒失せしかためなり、

一引用書は、努めて原本の舊に仍り、誤字脫文と認むへきものも概ね改竄せず、蓋し他には凡其字數を推して口符を塡充せり、但し搨頭闕字をは連書に改めたるもの多し、而して編者の加筆に係かるものは、必す首に○符を冠し、原文既に○符を用ふるものは◎符を施し、以て原文と區別したり、

一引用書名の下なる數字は、其書の卷數を示したれとも、或は冊數に從ひたるものあり、又或は全く略したるものあり、

一本書編纂の期短く、脫稿を急きたるため、推敲の足らさるは勿論、採錄すへき史料にして引用するを得さるものあり、且前後の體裁も或は統一を缺き、又時に文字の訛脫を免れさるものあり、殊に索引及ひ引用書の解題を附する能はす、是等皆編者の深く憾みとする所なり、

一引用書目は第四卷の卷末に附す、但し經濟雜誌社發行國史大系及び群書類從、近藤活版所發行改定史籍集覽所收のものは概ね之に據り、三州志は明治三十五年十一月發行の合冊本を主とし、間々明治十七年發行のものを採りたり、

書名の下に印本の二字を附記したるものは、賣品、非賣品を問はす、總て印刷せられたるものにして、其他は孰れも寫本に係る、

明治四十二年三月

越中史料

第一卷目次

神代

越洲の名始めて見はる、……一

崇神天皇

十年（紀元五百七十三年）

九月九日　大毘古命を遣はして、高志道を撫綏せしむ、……三

垂仁天皇

二十三年（紀元六百五十四年）

是歳　山邊大鷦鷯を追ふて高志國和那美の水門に到る、……六

天皇の時、大若子命勅を奉じて阿彦の亂を平ぐ、……八

景行天皇

二十五年（紀元七百五十五年）

七月三日　武內宿禰を遣はして、北陸を巡視せしむ、……九
成務天皇
●●●●●　市入命を高志國造となし、大河音足尼を伊弥頭國造となす、……九
仲哀天皇
元　年紀元八百五十二年
閏十一月四日　越國、白鳥四隻を貢す、……一〇
敏達天皇
二　年紀元千二百三十三年
五月三日　高麗の使人、越海に至り、船破れ溺死するもの衆し、……一二
三　年紀元千二百三十四年
五月五日　高麗の使人、越の海岸に泊り、尋て上京す、……一二
崇峻天皇
二　年紀元千二百四十九年
七月一日　阿倍臣、越の國境を觀察す、……一三
皇極天皇

元　年紀元千三百二年
九月三日　近江、及び越の丁を發して、百濟の大寺を造らしむ、……一四
二十一日　越邊の蝦夷內附す、……一四
齊明天皇
四　年紀元千三百十八年
四月　越國守阿倍比羅夫、蝦夷を伐ち、遂に肅愼を征す、……一五
天武天皇
●●●●●●　越國を分ちて、越前越中越後となす、……一九
文武天皇
大寶三年紀元千三百十三年
正月二日　高向大足を、北陸道に遣はして、治績を巡省せしむ、……一九
慶雲三年紀元千三百十六年
二月二十六日　越中國の神社、祈年幣帛の例に入る、……一九
元明天皇
和銅二年紀元千三百十九年

三月五日　越中等の兵を徴發して、越後の蝦夷を征討せしむ、……二〇
六月九日　越中國疫あり、……二〇
七月十三日　越中等をして、船一百艘を征狄所に送らしむ、……二一
九月二十六日　越中等の國士の、征役久しき者には復を賜ふ、……二一

元正天皇

養老元年 紀元千三百七十七年
九月十八日　越中國司等、風俗の雜伎を奏す、……二二
養老三年 紀元千三百七十九年
七月九日　東海東山北陸三道の民を遷して、出羽柵に配す、……二二
十三日　越前國守多治比廣成、能登越中越後を管す、……二二

聖武天皇

天平四年 紀元千三百九十二年
九月五日　田口年足を、越中守となす、……二三
天平十一年 紀元千三百九十九年
正月一日　越中國、白烏を獻す、……二三
天平十三年 紀元千四百一年
三月二十四日　每國に金光明四天皇護國寺、法華滅罪寺を置かしむ、……二四
十二月十日　能登國を、越中國に併す、……二五
天平十五年 紀元千四百三年
十月十七日　北陸等三道の調庸は、紫香樂の宮に貢せしむ、……二六
天平十六年 紀元千四百四年
九月十五日　石川東人は、北陸道巡察使となる、……二六
天平十八年 紀元千四百六年
四月五日　巨勢奈氏麻呂は、兼北陸山陰兩道の鎮撫使となる、……二七
六月二十一日　大伴家持、越中守に任ず、……二八
天平十九年 紀元千四百七年
九月二日　礪波志留志、米を盧舍那佛に奉せしを以て、外從五位下を授く、……二六
十一月四日　茨田王、越中守に任ず、……二六
天平勝寶元年 紀元千四百九年

閏五月二十七日　越中國掾大伴池主、越前國掾に遷り、久米廣縄之れに代り、
尋て京師に赴き、是に至りて歸任せり、……三七
天平勝寶三年（紀元千百十一年）
六月十七日　越中守大伴家持、少納言に任す、……四〇
天平勝寶六年（紀元千百十四年）
五月十四日　石川豐人、越中守に任す、……四七
天平寶字元年（紀元千百十七年）
五月八日　越中國を分ちて、復能登を置く、……四八
淳仁天皇
天平寶字二年（紀元千百十八年）
正月五日　紀廣純を、北陸道に遣はして、民の疾苦を巡問せしむ、……四九
九月二十八日　始めて、越中等諸國に驛鈴を頒つ、……四九
天平寶字三年（紀元千百十九年）
五月九日　諸國に常平倉を置きて、遠脚の飢苦を救はしむ、……五〇
九月十九日　新羅を征せんかため、北陸道の諸國に課して兵船を造らしむ、……五〇
十一月十四日　東大寺、越中國諸郡庄園總券成る、……五一
天平寶字四年（紀元千百二十年）
正月二十一日　石上奥繼、北陸道巡察使となる、……六九
天平寶字五年（紀元千百二十一年）
正月十六日　阿倍朝臣廣人、越中守に任す、……六九
十月一日　蜜奚野、越中員外介に任す、……六九
十日　唐主の、牛角を請ひしを以て、東山北陸等の諸國に命して之を貢せしむ、……七〇
天平寶字八年（紀元千百二十四年）
九月十二日　北陸道に命して、太政官の印を用ふることを停む、……七〇
稱德天皇
天平神護元年（紀元千百二十五年）
四月四日　越中等の國飢う、之を賑給せしむ、……七一
天平神護二年（紀元千百二十六年）

七月二十二日　國見安曇、越中介に任す、……七一
九月二十三日　豐野出雲は北陸道巡察使となる、……七一

神護景雲元年（紀元千四百二十七年）

三月二十日　利波臣志留志、越中員外介に任す、……七二
四月二日　佐伯御形、越中守となる、是日、東大寺三綱所に移牒す、……七二
五月七日　東大寺、越中國墾田地檢校帳成る、……七三
十一月十六日　東大寺、越中國墾田野地圖目錄帳成る、……七七
是月　越中等諸國の乘田を、四天王寺に捨入す、……八四

神護景雲二年（紀元千四百二十八年）

閏六月三日　甘南備伊香、越中守に任す、……八四

光仁天皇

寶龜元年（紀元千四百三十年）

十二月二十八日　皇市東朝、越中介に任す、……八五

寶龜三年（紀元千四百三十二年）

四月二十七日　石川眞守、越中守に任す、……八五

三月五日　牟都伎王、越中介に任す、……八六

寶龜六年（紀元千四百三十五年）

三月二日　始めて越中國に、大少目員を置く、……八六

寶龜七年（紀元千四百三十六年）

三月六日　牟都伎王、越中守に、小治田諸成、越中介に任す、……八七

寶龜八年（紀元千四百三十七年）

十月十三日　安倍笠成、越中守に任す、……八七

寶龜九年（紀元千四百三十八年）

二月二十三日　紀宮人、越中介に任す、……八七
八月二十日　路石成、越中介に任す、……八八

寶龜十一年（紀元千四百四十年）

五月十四日　越中等諸國をして、糒を貯へて機要に備へしむ、……八八
七月二十六日　北陸道緣海をして、賊船の來襲に備へしむ、……八八
十二月十四日　射水郡二上神、礪波郡高瀨神は從五位下に叙す、……八九

桓武天皇

延暦元年紀元千四百四十二年
閏正月十七日　中宮少進物部國足をして、越中介を兼ねしむ、……九三
延暦二年紀元千四百四十三年
二月二十五日　調使王、越中守に任す、……九四
延暦四年紀元千四百四十五年
正月十五日　佐伯廻守、越中介に任す、……九四
延暦六年紀元千四百四十七年
二月五日　紀馬守、越中守に任す、……九五
延暦七年紀元千四百四十八年
三月二日　北陸等諸國に命して、糒鹽を陸奥國に運はしむ、……九五
延暦八年紀元千四百四十九年
二月四日　大判事橘綿裳をして、越中介を兼ねしむ、……九五
六月　藤原廻養は、越中守たり、……九六
延暦十年紀元千四百五十一年

六月五日　石浦王、越中守に任す、……九六
延暦十一年紀元千四百五十二年
六月十四日　越中國の健兒をして、兵庫鈴藏及ひ國府を守らしむ、……九六
延暦十二年紀元千四百五十三年
六月二十三日　越中國は、新宮の安嘉門を造る、……九七
延暦十四年紀元千四百五十五年
八月十八日　高瀨神・雄神二上神並に從五位上に叙す、……九八
延暦十八年紀元千四百五十九年
正月二十九日　石淵王、越中守に、村國息繼越中介に任す、……九九
六月二十五日　越中國飢う、使を遣はして賑給せしむ、……九九
延暦二十一年紀元千四百六十二年
九月三日　越中等三十一國の損田の租稅を免し、調を徵す、……一〇〇
延暦二十三年紀元千四百六十四年
正月二十四日　藤原山人、越中權介に任す、……一〇〇
六月十日　越中國を、上國と定む、……一〇〇

延暦二十四年（紀元千四百六十五年）
五月二十六日　越中國飢う、使を遣はして賑給せしむ、……一〇一
十二月七日　越中國等の庸を免す、……一〇一
平城天皇
大同元年（紀元千四百六十六年）
五月二十四日　參議秋篠安人、北陸道觀察使となる、……一〇二
大同三年（紀元千四百六十八年）
四月　山陽道觀察使藤原園人、北陸道の事を攝行す、……一〇二
大同四年（紀元千四百六十九年）
四月十三日　藤原仲成、北陸道觀察使に任す、……一〇三
嵯峨天皇
弘仁元年（紀元千四百七十年）
五月二十七日　渤海使首領高多佛を越中國に置き、史生、習語生等をして、就きて渤海語を習はしむ、……一〇三
弘仁三年（紀元千四百七十二年）
五月十二日　藤原應養、再ひ越中守に任す、……一〇四
二十八日　越中國の講師をして、能登國の諸寺を檢校をせしむ、……一〇五
弘仁四年（紀元千四百七十三年）
二月十三日　家繼、越中權介に任す、……一〇六
弘仁五年（紀元千四百七十四年）
十二月二日　登美藤津、越中守に任す、……一〇六
弘仁六年（紀元千四百七十五年）
正月十日　安倍雄能麻呂、左馬頭兼越中介に任す、……一〇七
二月九日　越中介大伴黑成、掾多治比清雄等、官物を盜みしを以て、官を免す、……一〇七
弘仁十四年（紀元千四百八十三年）
六月二十三日　和氣眞綱、越中守に任す、……一〇七
淳和天皇
天長二年（紀元千四百八十五年）
是歳　春宮亮藤原三成をして、越中守を兼ねしむ、……一〇九

天長六年（紀元千四百八十九年）
七月十九日　越中の伊四、吉彌侯部江岐麻呂、從八位上に叙す、……一一〇
天長七年（紀元千四百九十年）
十一月　春宮亮藤原良房をして、越中權守を兼ねしむ、……一一〇
仁明天皇
承和元年（紀元千四百九十四年）
正月十二日　石川越知人、越中介に任す、……一一一
承和三年（紀元千四百九十六年）
閏五月五日　吉田高世、越中介に任す、……一一二
承和四年（紀元千四百九十七年）
六月二十八日　越中介吉田高世等、興世朝臣の姓を賜ふ、……一一三
十二月四日　越中少目錦部人勝、蕃良宿禰の姓を賜ふ、……一一三
承和五年（紀元千四百九十八年）
九月二十九日　越中等の諸國、灰の如きもの雨る、……一一四
十一月二十日　侍從正行王をして、越中守を兼ねしむ、……一一四

承和六年（紀元千四百九十九年）
六月二十八日　慶雲、新川郡に見はる、……一一四
承和七年（紀元千五百年）
正月三十日　長岑秀名、越中介に任す、……一一五
九月二十九日　高瀨神・二上神並に從四位上を授く、……一一六
承和八年（紀元千百一年）
正月二十二日　坂本廉野、越中介に任す、……一一六
三月二十九日　越中等諸國の調貢の期は、十一月に復す、……一一六
承和九年（紀元千百二年）
正月十三日　參議朝野鹿取、兼越中守に任し、尋て藤原岑人を越中權掾に任す、……一一七
承和十年（紀元千百三年）
二月三日　味眞公御助麻呂、越中介に任す、……一一七
六月十一日　參議兼越中守朝野鹿取薨す、……一一八
二十八日　大學博士御船氏主をして、越中守を兼ねしむ、……一二〇

承和十二年（紀元千百五年）
九月一日　婦負郡鵜坂神に從五位上を授け、新川郡日置神に從五位下を授く、……一二〇
承和十四年（紀元千百七年）
正月十二日　刑部卿源明をして、越中守を兼ねしむ、……一二五
嘉祥元年（紀元千百八年）
正月十三日　藤原安永越中守に、安墀豐額越中介に任す、……一二六
三月二十日　和氣豐永越中守に任す、……一二六
六月三日　越中國飢う、之を賑給す、……一二六
嘉祥二年（紀元千百九年）
四月二十八日　越中博士紀生永等、本居を改めて、左京に貫附す、……一二六
文德天皇
仁壽元年（紀元千百十一年）
正月十一日　紀椿守、越中權守に任す、……一二七
仁壽二年（紀元千百十二年）
正月十五日　刑部卿源寬、越中守に、山代氏益、越中介に任す、……一二七
仁壽三年（紀元千百十三年）
三月二十八日　越中權守、紀椿守卒す、……一二八
七月一日　大學博士春日雄繼をして、越中權守を兼ねしむ、……一二八
齊衡元年（紀元千百十四年）
三月七日　高瀨神二上神、並に從三位を加ふ、……一二八
十二月二十七日　高瀨神二上神等の、祠宜祝に笏を把るを許す、……一二九
齊衡三年（紀元千百十六年）
正月十二日　源啓、越中守に任す、……一二九
七月十一日　越中國、旱す、……一三〇
八月二十七日　越中權守春日雄繼に、大春日朝臣の姓を賜ふ、……一三〇
天安元年（紀元千百十七年）
正月十四日　春原末繼、越中介に任す、……一三〇
三月二日　齋部木上、越中介に任す、……一三〇
六月十九日　左近衛少將良岑清風をして、越中權介を兼ねしむ、……一三一

七月九日　越中等の國司より、不堪佃田の實に據らざる者を處罰せしことを奏す、……一三一
天安二年紀元千五百十八年
三月八日　房世王、越中權守に任す、……一三一
清和天皇
貞觀元年紀元千五百十九年
正月十三日　廣宗糸繼、越中守に任す、……一三二
二十七日　高潮神・二上神並に正三位を授く、……一三二
貞觀二年紀元千五百二十年
五月二十九日　鵜坂神に從四位下を、日置神に正五位上を授く、……一三三
貞觀三年紀元千五百二十一年
正月十三日　大判事橘春成、越中權守に、大江直臣、介に任す、……一三三
二月二十五日　紀伊介菅野高松、越中介に任す、……一三三
貞觀四年紀元千五百二十二年
二月十二日　藤原春岡、越中守に任す、……一三四
十月九日　鵜坂神に從四位上を授く、……一三四
貞觀五年紀元千五百二十三年
二月十日　下野守基棟王、越中守に任す、……一三四
六月十七日　越中越後等の國、地大に震ひ、壓死者衆し、……一三五
八月十五日　越中國鵜坂姉比咩神・鵜坂妻比咩神・杉原神並に從五位下を授く、……一三五
九月二十五日　雄山神に正五位上を授く、……一三六
貞觀六年紀元千五百二十四年
三月二十三日　楯桙神に從五位下を授く、……一四七
貞觀七年紀元千五百二十五年
正月二十七日　下野守棟貞王、越中守に、散位久賀三常權守に任す、……一四八
貞觀八年紀元千五百二十六年
正月十三日　右大史菅野宗之、越中介に任す、……一四九
五月十九日　越中等諸國、毎年貢する所の馬革の數を改む、……一四九
十月八日　越中國の奏請に依り、故郷に歸らざる國司博士醫師に交

替丁を給することを停む、……一五〇

貞觀九年（紀元千五百二十七年）

二月二十七日　鵜坂神に從三位を、日置神に從四位上を、新川神に從四位下を授く、……一五〇

十月五日　越中國御田神等に、從五位上を授く、……一五一

貞觀十年（紀元千五百二十八年）

正月十六日　良秀王、越中守に任す、……一五二

三月七日　越中國の雜堂、調庸を免す、……一五二

貞觀十一年（紀元千五百二十九年）

三月二十三日　源弼、越中權介に任す、……一五三

九月十五日　越前介志紀氏經、越中介に任す、……一五三

貞觀十三年（紀元千五百三十一年）

九月八日　佛像を五畿七道に分置し、北陸道には七鋪を分つ、……一五三

十一月十日　栢梓神に從五位上を授く、……一五四

貞觀十五年（紀元千五百三十三年）

四月二十一日　越中守峰雄の女賀茂氏所生の皇子長猷等源氏となる、……一五五

八月二十八日　越中守橘宗嗣の子貞根卒す、……一五六

十二月十五日　越中國賀積神に從五位下を授く、……一五六

貞觀十八年（紀元千五百三十六年）

正月二十七日　越中國白雉を獻ず、……一五七

四月十一日　大學博士善淵永貞をして、越中守を兼ねしむ、是日、永貞等、火災廢朝の議を上言す、……一五七

七月十一日　新川神に從四位上を、櫛田神に從五位下を授く、……一五八

元慶二年（紀元千五百三十八年）

正月十一日　平定相、越中介に任す、……一六〇

二月十五日　大和權介春岳冬通、越中權介に任す、……一六〇

五月八日　手向神に從五位下を授く、……一六一

八月四日　越中・越後兩國に命して、軍糧一千斛を送らしむ、……一六二

元慶三年（紀元千五百三十九年）

二月八日　御田神に正五位下を授く、……一六二

十月二十九日　雄神に從四位上を、石武雄神に從五位下を授く、……一六二

元慶七年（紀元千五百四十三年）……
正月二十六日　越中國等に命して、渤海の客を饗するため、酒宍魚鳥蒜等を加賀國に送らしむ、……一六三
二　月　源湛、越中守に任ず、……一六三
三　月四日　越中國調貢期限の延期を請ふ、……一六四
十二月二十八日　新治神に從五位下を授く、……一六五

光孝天皇

仁和二年（紀元千五百四十六年）
正月十六日　左京權亮藤原高尙、越中介に任ず、……一六六
十二月十八日　伊福頭眞益、官用を助けしに依り、外從五位下を授く、……一六六

仁和三年（紀元千五百四十七年）
二月五日　貢調の期を遲へる爲め、越中國司等の位祿を褫ふ、……一六七
十七日　治部大輔橘休蔭、越中守に任ず、……一六七

宇多天皇

寛平七年（紀元千五百五十五年）
十二月九日　越中國に警師を置きて、不虞に備ふ、……一六八
寛平九年（紀元千五百五十七年）
正月二十五日　諸國點貢の采女の數を定め、越中國は一人とす、……一六八
六　月　橘秋實、越中守たり、……一六九

醍醐天皇

延喜三年（紀元千五百六十三年）
六月二十日　越中等十一國に讀師を置く、……一七〇
延喜八年（紀元千五百六十八年）
八月十六日　氣多神、官幣に預る、……一七一
延喜十年（紀元千五百七十年）
七　月　清原正基、越中守たり、……一七三
延喜二十年（紀元千五百八十年）
二　月　惟親、越中守たり、……一七四
延喜中（紀元千五百六十年より同千五百八十二年まで）……
越中國の神社中、礪波郡の七座、射水郡の十三座、婦負郡の……

七座、新川郡の七座を、神名帳に載す、……一七四
越中の稅率、貢蘇の期限、交易雜物、運賃及ひ健兒器仗、驛傳馬の數を定む、……一七九
延長八年（紀元千五百九十年）
月　葛井清明、越中守に任す、……二〇二
六
村上天皇
天曆中（紀元千六百七年より同千六百十六年まで）
射水郡の一部、東大寺の封戶となる、……二〇二
圓融天皇
天祿元年（紀元千六百三十七年）
僧海運寂す、……二〇三
天祿中（紀元千六百三十年より同千六百三十二年まで）
藤原仲遠、越中守たり、……二〇四
一條天皇
長德三年（紀元千六百五十七年）

八　月　紀齊名、越中權守たり、……二〇五
長曆二年（紀元千六百九十八年）
八月二十五日　伊勢齋王の大神宮に參入せらるを以て、大祓使を諸國に發し、北陸道には大中臣爲輔を遣はす、……二〇六
後冷泉天皇
康平四年（紀元千七百二十一年）
十二月　源家賢、越中權守に任す、是歲、藤原正家、越中守たり、……二〇七
康平七年（紀元千七百二十四年）
三月　前出羽守源義家狀を上り、征夷の功を以て、越中守に補せられんことを請ふ、……二〇八
康平中（紀元千七百十八年より同千七百二十四年まで）
越中介射水親元卒す、……二一〇
治曆元年（紀元千七百二十五年）
九月一日　太政官符を越中國司に下し、莊園を禁じ、運漕の調物を割取することを遏めしむ、……二一一

治暦三年（紀元千七百二十七年）
十月七日　越中守豐原奉季、造橋の功に依り任を延はす、……二一三
白河天皇
承暦元年（紀元千七百三十四年）
十月　藤原資清、越中守たり、……二一四
承暦四年（紀元千七百三十七年）
正月　藤原公盛、越中守たり……二一四
六月十日　御體御卜奏に依り、使を越中國の鵜坂・白鳥三宅等の、諸神社に遣はし、社司に中祓を科せしむ、……二一四
堀河天皇
寛治五年（紀元千七百五十一年）
正月　橘頼里、越中守たり、……二一七
康和元年（紀元千七百五十九年）
正月二十三日　藤原通季、越中權守に任す、……二一七
康和二年（紀元千七百六十年）
七月二十三日　藤原基實、越中守となり、是日、狀を上り造内裏の功を以て、一階を加叙せられんことを請ふ、……二一八
康和五年（紀元千七百六十三年）
六月十日　御體御卜奏に依り、使を越中國の高瀬・鵜坂・白鳥・速川等の、諸神社に遣はし、社司に中祓を科せしむ、……二一九
八月　源重資、越中權守たり、……二二一
嘉承元年（紀元千七百六十六年）
十一月　高階宗章、越中守たり、……二二一
嘉承二年（紀元千七百六十七年）
正月二十八日　前越中大掾藤原爲兼、狀を上り穀倉院學問料を給せられんことを請ふ、……二二一
五月　藤原宗隆、越中權守たり、……二二三
鳥羽天皇
永久二年（紀元千七百七十四年）
二月　源俊親、越中守たり、……二二三

崇德天皇

天治元年（紀元千七百八十四年）

十月　中原成俊、越中權守たり、……二二四

大治元年（紀元千七百八十六年）

二月二十四日　藤原公能、越中守に任す、……二二五

大治二年（紀元千七百八十七年）

五月　源仲經、越中守たり、……二二五

十一月四日　鳥羽上皇、高野山に登り東塔を供養し給ふ、塔は、越中守公能の造進に係かる、……二二六

是月　平忠盛、越中守たり、……二二七

大治四年（紀元千七百八十九年）

十二月　藤原顯長、越中守に任す、……二二七

大治五年（紀元千七百九十年）

二月四日　天皇、三條京極第より土御門內裏に遷御せらる、內裏は越中守顯長の造進に係かる、……二二八

八月　源雅光、越中權守たり、……二二八

長承元年（紀元千七百九十二年）

正月　源忠兼、越中權守に任す、……二二八

長承二年（紀元千七百九十三年）

二月　源顯定、越中守たり、……二二九

保延元年（紀元千七百九十五年）

正月二十八日　藤原顯業、越中權介に任す、……二二九

保延三年（紀元千七百九十七年）

十二月十六日　源資賢、越中守に任す、……二二九

保延五年（紀元千七百九十九年）

八月四日　算博士三善爲康卒す、……二三〇

近衛天皇

久安二年（紀元千八百六年）

正月　藤原顯成、越中守に任す、……二四一

久安四年（紀元千八百八年）

正月　高階政家、越中權守に任す、……二四二
仁平二年（紀元千八百十二年）
二月二十九日　前越中守源俊親卒す、……二四三
閏十二月　藤原隆敎、越中守に任す、……二四四
久壽元年（紀元千八百十四年）
八月十日　新川郡新治村海嘯のため陷沒す、……二四四
後白河天皇
保元二年（紀元千八百十七年）
十二月　藤原光隆、越中守に任す、……二四五
二條天皇
平治元年（紀元千八百十九年）
十二月二十七日　平敎盛、藤原信賴を亡ぼし、功を以て越中守に任す、……二四六
永曆元年（紀元千八百二十年）
正月　藤原光雅、越中守に任す、……二四七
長寛二年（紀元千八百二十四年）
正月　藤原定隆、越中守に任す、……二四七
永萬元年（紀元千八百二十五年）
七月　藤原資賴、越中守に任す、……二四七
六條天皇
仁安二年（紀元千八百二十七年）
七月二十五日　越中守藤原隆保卒す、……二四八
仁安三年（紀元千八百二十八年）
正月　源有雅、越中權守に任す、……二四九
高倉天皇
安元元年（紀元千八百三十五年）
八月　平盛俊、越中守たり、……二五〇
安元二年（紀元千八百三十六年）
正月　清原賴業、越中權守に任す、……二五〇
治承三年（紀元千八百三十九年）
正月　藤原雅隆、越中守たり、……二五一

正月　高階政家、越中權守に任す、……二四二
仁平二年（紀元千八百十二年）
二月二十九日　前越中守源俊親卒す、……二四三
閏十二月　藤原隆教、越中守に任す、……二四四
久壽元年（紀元千八百十四年）
八月十日　新川郡新治村海嘯のため陷沒す、……二四四
後白河天皇
保元二年（紀元千八百十七年）
十二月　藤原光隆、越中守に任す、……二四五
二條天皇
平治元年（紀元千八百十九年）
十二月二十七日　平敎盛、藤原信賴を亡ぼし、功を以て越中守に任す、……二四六
永曆元年（紀元千八百二十年）
正月　藤原光雅、越中守に任す、……二四七
長寛二年（紀元千八百二十四年）
正月　藤原定隆、越中守に任す、……二四七
永萬元年（紀元千八百二十五年）
七月　藤原資賴、越中守に任す、……二四七
六條天皇
仁安二年（紀元千八百二十七年）
七月二十五日　越中守藤原隆保卒す、……二四八
仁安三年（紀元千八百二十八年）
正月　源有雅、越中權守に任す、……二四九
高倉天皇
安元元年（紀元千八百三十五年）
八月　平盛俊、越中守たり、……二五〇
安元二年（紀元千八百三十六年）
正月　清原賴業、越中權守に任す、……二五〇
治承三年（紀元千八百三十九年）
正月　藤原雅隆、越中守たり、……二五一

治承四年（紀元千八百四十年）
正月　平業家を越中守に、藤原宣親を、越中權守に任す、……二五一
安德天皇
養和元年（紀元千八百四十一年）
二月七日　前越中守平盛俊を、丹波國諸庄園總下司と爲す、……二五二
壽永二年（紀元千八百四十三年）
五月十一日　源平兩軍、般若野に戰ひ、尋て又礪波山に戰ふ、……二五二
是月　藤原範高、越中權守たり、……二八九
八月十八日　以仁王の王子北陸宮、越中の宮崎に居給ふ、……二八九
是月　平親長、越中守に任す……二九五
後鳥羽天皇
文治元年（紀元千八百四十五年）
八月十四日　源惟義、越中守に任す、……二九六
十二月二十七日　藤原家隆、越中守に任す、……二九六
文治二年（紀元千八百四十六年）
六月二十一日　賴朝、奏して山城及越中等三十七國の武士の濫妨を禁停せしめんことを請ふ、……二九八
十一月二十五日　宣旨を畿內及び北陸道に下して、源義經を逮捕せしむ、……三〇〇
文治三年（紀元千八百四十七年）
三月二日　源賴朝、院旨を奉して、越中國吉岡莊の地頭を改替す、……三〇七
文治四年（紀元千八百四十八年）
七月二十四日　院宣を東大寺に下し、其の所領の越中等諸國に在る、土地の役夫工米を免除す、……三〇八
建久元年（紀元千八百五十年）
正月二十四日　藤原資家、越中守に任し、藤原忠經をして、越中權守を兼ねしむ、……三〇九
四月十九日　賴朝、院宣を奉して、越中等諸國の地頭に、神宮の役夫工米の進濟を催す、……三〇九
是月　主殿寮、越中等諸國の油仕丁等の、辨濟を怠るものを注進す、……三一〇

建久二年紀元千八百五十一年
五月十九日　西大寺、宣旨に依り、其の所領越中等諸國の莊園を注進す、……三一二
建久四年紀元千八百五十三年
正月二十九日　源有通をして、越中權介を兼ねしむ、……三一二
三月十六日　幕府、兵衛尉泰清に命じて、平家の與黨越中盛繼等を討たしむ、……三一三
建久九年紀元千八百五十八年
正月三十日　藤原公長、越中守に任す、……三一六
土御門天皇
元久二年紀元千八百六十五年
正月二十九日　藤原頼繼、越中權守に任す、……三一七
九月十六日　官符を下して、祇園社領越中國黑川郷堀江保の國役等を免除す、……三一八
十一月二十九日　藤原頼季、越中守に任す、……三一九
建永元年紀元千八百六十六年
一月　藤原宗明、越中守に任す、……三一九
承元二年紀元千八百六十八年
七月九日　藤原仲經、越中守に任す、……三二〇
順德天皇
建曆元年紀元千八百七十一年
四月六日　幕府、越中人院林二郎をして、石黑莊院林・太海雨郷、惣追捕使職を安堵せしむ、……三二一
建保三年紀元千八百七十五年
正月十三日　民部少輔藤原長倫をして、越中權介を兼ねしむ、……三二二
承久元年紀元千八百七十九年
八月　源資俊、越中守に任す、……三二二
承久二年紀元千八百八十年
正月二十二日　菅原淳高をして、越中權介を兼ねしむ、……三二三
十月十四日　幕府、伊勢國乙部郷・越中國小針原莊・地頭職新藤氏に、新券を給す、……三二三

仲恭天皇

承久三年（紀元千八百八十一年）

六月八日　北條義時、將に京師を犯さんとし、北條朝時をして、北陸道より進ましむ、官軍の將宮崎定範、石黒林等を從ひ、之を越中に拒きて敗績す、……三二四

七月二十七日　諸國の社寺の莊預、武士等の狼藉を禁す、……三二八

後堀河天皇

嘉祿元年（紀元千八百八十五年）

正月二十三日　藤原公賢、越中權守に任す、……三三一

嘉祿二年（紀元千八百八十六年）

正月二十三日　藤原實平をして、越中權守を兼ねしむ、……三三一

十一月　藤原頼後、越中守に任す……三三一

寛喜元年（紀元千八百八十九年）

十月　藤原高經、越中守に任す、……三三二

寛喜二年（紀元千八百九十年）

正月二十四日　源有資、越中介に任す、……三三二

十一月　親繼、○姓越中權守たり、……三三二

貞永元年（紀元千八百九十二年）

八月二十一日　前東寺長者權大僧都良遍寂す、……三三二

四條天皇

延應元年（紀元千八百九十九年）

七月二十五日　幕府、越中國東條、河口、曾禰、八代の四保を地頭請所となし、東福寺に屬し、國役を免す、……三三五

嘉禎三年（紀元千八百九十七年）

正月二十四日　藤原道嗣、越中權守に任す、……三三六

寛元二年（紀元千百四年）

十二月廿四日　威神院領、越中國堀江莊內西條村雜掌藤原康久、地頭代國繼の貢租を納れざるを訴ふ、是日、幕府、國繼に命して究濟せしむ、……三三六

寛元三年（紀元千百五年）

正月十三日　藤原信盛、越中權守に任す、……三三八
六　月　卜部兼遠、越中守に任す、……三三八

後深草天皇

建長三年（紀元百十一千九年）
五　月　藤原有清、越中守に任す、……三三九

正元元年（紀元百十九千九年）
正月二十一日　菅原在章をして、越中介を兼ねしむ、……三三九
四月十七日　平信輔をして、越中守を兼ねしむ、……三三九

龜山天皇

文應元年（紀元二千九百十年）
三月二十九日　藤原伊定をして、越中權介を兼ねしむ、……三四〇

弘長三年（紀元二千九百十三年）
正月二十八日　大江重房をして、越中介を兼ねしむ、……三四〇

文永九年（紀元三千九百十二年）
七月十一日　藤原顯雅をして、越中權守を兼ねしむ、……三四一

文永十年（紀元三千九百十三年）
四月十二日　藤原冬季、越中守に任す、……三四一

文永十一年（紀元三千九百十四年）
二月二十日　藤原有通をして、越中介を兼ねしむ、……三四二

後宇多天皇

建治三年（紀元三千九百十七年）
正月二十九日　藤原公重、越中權守に任す、……三四二
八月十一日　越中守、宇都宮頼業卒す、……三四三

弘安六年（紀元四千九百十三年）
三月二十八日　藤原光泰、越中權介に任す、……三四五

弘安九年（紀元四千九百十六年）
十一月五日　越中國石黑莊直海鄕の、外宮役夫工米を免す、……三四六

伏見天皇

正應元年（紀元四千九百十八年）
二月十日　藤原俊光をして、越中介を兼ねしむ、……三四七

四　月　源仲經、越中守たり、……三四七

後伏見天皇

永仁六年（紀元千九百五十八年）　藤原親方、越中守に任す、……三四八

九月十三日

後二條天皇

嘉元元年（紀元千九百六十三年）　清原良枝、越中權守に任す、……三四八

正　月

花園天皇

延慶元年（紀元千九百六十八年）

十一月二十三日　幕府、院林左衛門尉と圓宗寺との、太海・院林兩鄕地頭職を和與せしことを聽す、……三四九

延慶三年（紀元千九百七十年）

十　一　月　藤原經康、越中守に任す、……三五一

正和元年（紀元千九百七十二年）

正　月　丹波長直、越中守たり、……三五一

文保元年（紀元千九百七十七年）

三月二十七日　藤原資名をして、越中權守を兼ねしむ、……三五一

文保二年（紀元千九百七十八年）

正月二十二日　藤原光經をして、越中權守を兼ねしむ、……三五二

後醍醐天皇

元亨三年（紀元千九百八十三年）

八月二十七日　僧源照、信光寺を搬む、……三五二

嘉曆二年（紀元千九百八十七年）

三　月　一　日　氷見道乘寺日遥、寂す、……三五三

元弘三年（紀元千九百九十六年、北朝光嚴天皇正慶二年）

二月十九日　北條高時、皇子恒性を越中に遷し、之を害し奉る、……三五四

五月十七日　越中守藤名越時有等、放生津に自殺す、……三五五

建武元年（紀元千九百九十四年）

正月十三日　藤原氏衡をして、越中權介を兼ねしむ、……三五八

四月十二日　藏人所、牒を北陸道七國に移して、舊規に從ひ貢蘇を備進

せしむ、……三五九
建武二年（紀元千九百九十五年）
八月　中院定清越中守となる、時に名越時兼、北條時行に應して兵を北陸に擧く、定清、軍を率ゐて之を討つ、……三六一
十二月十二日　越中守護普門利清、中院定清を攻む、定清、石動山に敗死す、……三六五
延元元年（紀元千九百九十六年）
二月七日　足利尊氏、越中の院林了法の請に依り、元弘以來收公の所領を復せしむ、……三六七
五月　羽川時房越中守たり、……三七〇
九月十七日　光嚴上皇、勅修寺に、越中等諸國の寺領を安堵せしむ、……三七〇
延元二年（紀元千九百九十七年　北朝光明天皇建武四年）
七月二十一日　光嚴上皇、越中黑田保等の所務を全くせしめ給ふ、……三七一
十二月二十四日　尊氏、佐々木頼宗の勳功を賞して、越中田中保半分の地頭職を與ふ、……三七一
延元三年（紀元千九百九十八年　北朝暦應元年）
四月二十二日　尊氏、山城祇園社に、越中堀江莊地頭職を寄附す、……三七二
閏七月十一日　光嚴上皇、院宣を尊氏に傳へ、三寶院領越中太海院林兩郷の濫妨を停めしめ給ふ、……三七二
●●●●●●　天皇の時、郷義弘佐伯則重、及び宇津國光、刀工を以て著はる、……三七三
後村上天皇
延元四年（紀元千九百九十九年　北朝暦應二年）
八月　禰津、○兩名、越中守たり、……三八一
興國元年（紀元二千年　北朝暦應三年）
五月二十日　尊氏、今河頼貞に命じ、院林了法の戰功を錄進せしむ、……三八二
九月十八日　光嚴上皇、三寶院と遍智院と、越中太海・院林兩郷を和與せることを聞食され、院林郷を以て遍智院に付せしめ給ふ、……三八三
興國二年（紀元二千一年　北朝暦應四年）
正月二十日　南朝瀧口義弘の勳功を賞して、越中射水郡東條莊地頭職を賜ふ、……三八五

六月十四日　南朝、瀧口藏人の勳功を賞して越中上津見保を賜ふ、……三八六
八月十二日　越中護國寺運良寂す、……三八六
興國三年（紀元二千二年　北朝康永元年）
十二月十五日　尊氏、東大寺八幡宮に、越中高瀬社地頭職を寄附す、……三九二
是春　後醍醐天皇の皇子宗良親王、越中名子に駐り給ふ、……三九三
興國五年（紀元二千四年　北朝康永三年）
十月二十五日　幕府、吉見頼隆に令し、能登の地頭家人等を催して、越中の南軍を擊たしむ、……三九九
十一月二十八日　幕府、院林了法の訴に依り、桃井直常に令して、今村十郎の越中院林太海兩郷地頭職を濫妨するを停め、之を了法に交付せしむ、……四〇〇
十二月二十九日　源雅顯、越中權守に任す、……四〇二
興國六年（紀元二千五年　北朝貞和元年）
正月二十九日　柳原資明、洞院公賢に謁し、越中和泉及び美濃の戰亂の狀を告ぐ、……四〇三

三月七日　吉見頼隆、井上俊清等を擊たんとし、越中に赴き、尋て高槻・滑河に戰ふ、……四〇四
六月三日　國泰寺妙意寂す、……四〇四
正平元年（紀元二千六年　北朝貞和二年）
三月十八日　吉見氏頼、越中より來りて木尾嶽城を攻む、是日、又其正門を攻む、南軍劇戰之を却く、後木尾嶽城陷る、……四〇六
閏九月十四日　北軍、尾張羽豆崎城を拔き、越中の普門氏を降し、新田の兒子を捕へ斬る、是日、足利氏、書を島津氏に贈りて之を報す、……四〇八
正平二年（紀元二千七年　北朝貞和三年）
十月　橘業俊、越中守に任す、……四〇九
正平三年（紀元二千八年　北朝貞和四年）
七月　源信顯、越中守に任す、……四〇九
正平五年（紀元二千十年　北朝崇光天皇觀應元年）
十月二十三日　直常、氷見湊を攻め、遂に進みて能登に入る、能登の井上、富來二氏も之に應し、得江石王丸の兵と戰ふ、……四一〇

十一月二十日　足利義詮、院林六郎左衛門に命して、越中の南軍を擊たしむ、……四一二

正平六年（紀元二千二十一年　北朝觀應二年）

正月十五日　桃井直常、足利直義に應し、越中の兵を率ゐて近江の坂本に抵る、是日、京師に入り足利義詮と戰ふ、……四一三

四月一日　足利氏、桃井直和に命し、逸見二郎三郎の、遍智院領院林郷の濫妨を止めしむ、……四二四

八月十八日　吉見氏頼能、登三引保赤藏寺に據る、桃井直信之を圍む、尋て、長秀信、曲松に軍し氏頼を援けて直信の兵と戰ふ、……四二六

正平七年（紀元二千十二年　北朝後光嚴天皇文和元年）

閏二月　高山○岡名越中守たり、……四二七

六月六日　吉見氏頼、能登より越中に入り、桃井直常等來り攻む、尋て、氏頼、水谷城を攻め氷見湊を襲ひ、三角山・木谷の諸城を攻む、……四二七

正平十年（紀元二千十五年　北朝文和四年）

二月六日　直常は、直冬等と京に入り、是日、山崎に戰ふ、……四二九

正平十一年（紀元二千十六年　北朝延文元年）

正月二十八日　藤原忠光をして、越中介を兼しむ、……四三一

十二月四日　幕府、井上左京權大夫に命し、波多某の、遍智院領院林郷の濫妨を停めしむ、……四三二

正平十四年（紀元二千十九年　北朝延文四年）

七月六日　吉見氏頼、得江石王丸を招く、……四三三

十二月　源兼世、越中守に任す、……四三三

正平十五年（紀元二千二十年　北朝後光嚴天皇延文五年）

●●●●●●●　上杉憲顯、越後・越中に轉戰し、東城寺城を圍み、是に至り、又赤田城を攻む、……四三三

正平十七年（紀元二千二十二年　北朝貞治元年）

五月二十八日　北軍、能登を攻む、富來院氏等を木尾城に破る、是日、足利義詮、書を北軍に與へて、諸城を陷れ、越中に入らしむ、……四三四

六月　直常、信濃より越中に至り、誓好を招致し、將に進みて加賀

の富樫介を攻めんとす、……四三五
正平十八年（紀元二千二十三年　北朝貞治二年）
六月五日　光禪寺旨淵寂す、……四三八
正平二十二年（紀元二千二十七年　北朝貞治六年）
二月十三日　菅原長綱をして、越中權守を兼ねしむ、……四三九
八月　伊井、○名岡越中守たり、……四三九
九月二十七日　義詮、三寶院僧正光濟を以て、鎮守八幡宮別當に補し、且越中吉河西東の地を本社に寄附し、其祭資に充つ、……四四〇
十一月十八日　足利氏の家人本郷昭覺の所領越中米田保地頭職を罰す者あり、是日幕府、守護桃井直信に命し、之を本主に付せしむ、……四四一
正平二十三年（紀元二千二十八年　北朝應安元年）
二月二十四日　直常、逃れて越中に來れり、……四四一
正平二十四年（紀元二千二十九年　北朝應安二年）
四月十二日　直常、直和等、松倉城を拔き、遂に能登に入り、吉見氏頼の族將頼顯伊豫入道と戰ふ、尋て頼顯能登の兵を率ゐて來り、富樫昌家を扶く、……四四三
後龜山天皇
建德元年（紀元二千三十年　北朝應安三年）
三月十六日　直常、直和を遣はして長澤に陣せしむ、越中守護斯波義將來り攻む、直和敗死し松倉城兵逃降相隨く、……四四八
建德二年（紀元二千三十一年　北朝應安四年）
四月　藤原仲宗、越中守に任す、……四五二
七月十七日　越中守護斯波義將、島田彌二郎に命して、其冐占する所の堀江莊地頭職小泉村を祇園社に還付せしむ、……四五三
二十八日　直常、義將と相戰ひ、是日、又能登軍と後位莊に戰ふ、……四五六
文中元年（紀元二千三十二年　北朝後圓融天皇應安五年）
十月十七日　朽木氏綱、所領越中國部田・岡成地頭職三分の二を、兄氏秀に讓る、……四五七
天授二年（紀元二千三十六年　北朝永和二年）

二月　菅原時親、越中權守に任す、……四五八
五月十四日　二宮信濃入道、稅錢を北朝藏人所所管、越中野市鑄物師に課す、義將令して之を止めしむ、……四五九
天授三年（紀元二千三十八年　北朝永和三年）
六月　越中の國人、守護代某と戰ひ、細川頼之の邑太田莊に逃る、某の兵入て之を捕ふ、頼之命し之を斬しむ、……四六〇
八月八日　京師訛言あり、義將、頼之と越中太田莊の事を爭ふと、……四六一
弘和三年（紀元二千四十三年　北朝後小松天皇永德三年）
歲　僧浮玉寂す、……四六二
元中七年（紀元二千五十年　北朝明德元年）
八月　僧綽如、瑞泉寺を創建す、……四六三
元中九年（紀元二千五十二年　北朝後小松天皇明德三年）
八月　佐佐木頼泰、越中守たり、……四七四
後小松天皇
應永七年（紀元二千六十年）
三月十二日　光禪寺正呈寂す、……四七四
應永八年（紀元二千六十一年）
三月二十四日　藤原公宣をして、越中權守を兼ねしむ、……四七五
應永十年（紀元二千六十三年）
三月四日　僧希讓寂す、……四七五
應永十一年（紀元二千六十四年）
三月十七日　藤原實富を、參議兼越中權守と爲す、……四七六
應永十三年（紀元二千六十六年）
歲　洪水飢饉、……四七六
應永十五年（紀元二千六十八年）
正月二十五日　立川寺大徹寂す、……四七七
應永十九年（紀元二千七十二年）
九月十一日　幕府、越中に棟別錢を課し、東寺修造費に充つ、……四八七
稱光天皇
應永二十六年（紀元二千七十九年）

十一月十三日　將軍義持、越中御服の地を、三條坊門八幡宮に寄附す、……四八八
應永二十八年（紀元二千八十一年）
三月二十六日　京都妙蓮寺日存寂す、後四年を經て其の弟日純寂す、……四八八
後花園天皇
永享二年（紀元二千九十年）
六月九日　將軍義教、越中富山柳町の地を、側室藤原尹子に與ふ、……四九〇
永享三年（紀元二千九十一年）
是歲　藤原實景、越中權守たり、……四九四
永享五年（紀元二千九十三年）
四月二十三日　多田院、其造營段錢を越中に追徵せんことを請ふ、幕府、之を聽す、……四九四
永享七年（紀元二千九十五年）
十一月二十五日　幕府、河內・紀伊・越中に段錢を課し、日前・國懸兩社の修造費に充つ、……四九五
嘉吉元年（紀元二千百一年）

八月　畠山持國、兵を遣り、弟持永を越中に擊つ、尋て、持永僧と爲り、播磨に走る、土人之を殺し、首を持國に送る、……四九六
文安五年（紀元二千百八年）
是歲　疫癘、飢饉、……四九六
寶德二年（紀元二千百十年）
七月十六日　大風雨、光怪あり、牛嶽より東北に飛ふ、……四九七
康正元年（紀元二千百十五年）
三月二十八日　藤原綱光をして、越中權守を兼ねしむ、……四九七
康正二年（紀元二千百十六年）
五月二十九日　內裏造營の段錢を、越中に課す、……四九八
寛正元年（紀元二千百二十年）
九月二十六日　幕府、畠山政長を召し、義就の封邑河內・紀伊・越中等の地を與ふ、……四九八
寛正二年（紀元二千百二十一年）
十月十七日　幕府、越前・尾張・守護斯波松王を廢して、澁川義廉を嗣と爲

し、是日、守護代朝倉敎景に、越前越中の地を割き之に授く、……四九九
是歳　藤原隆賴をして、越中權守を兼ねしむ、……四九九
寛正五年紀元二千二十四年百
二月二十五日　京都本能寺日隆寂す、……五〇〇
後土御門天皇
應仁二年紀元二千二十八年百
是歳　聞名寺、飛騨國より婦負郡に移る、……五〇一
文明三年紀元二千三十一年百
七月　佐渡國勝與寺、礪波郡土山に移る、……五〇三
十月十六日　幕府、越中守護代に命じ、二尊院をして、舊領富山柳町の所務を全くせしむ、……五〇八
文明五年紀元二千三十三年百
十月二十三日　大內政弘、畠山義就游佐越中守等を遣りて淀を守らしむ、……五〇九
文明六年紀元二千三十四年百
閏五月二十四日　二尊院領越中富山柳町の地を、濫妨するものあり、是日、幕府、守護代に命じて之を停止せしむ、……五〇九
文明七年紀元二千三十五年百
七月十六日　僧蓮如、礪波郡瑞泉寺に來り、眞宗を弘む、……五一一
文明十五年紀元二千四十三年百
三月十日　蜷川親當卒す、……五一六
九月十七日　椎名某、游佐長直は、畠山義就の兵と戰ひ、某戰死し、長直傷き走る、……五二一
文明十八年紀元二千四十六年百
六月十一日　幕府、齋藤基守に命し、越中松尾莊を松尾社に還付せしむ、……五二三
長享二年紀元二千四十八年百
六月九日　加賀越中の一向宗徒、富樫政親を高尾城に攻む、幕府、朝倉貞泰に命して、之を援はしむ、是日、城陷り政親自殺す、宗徒、更に能登越中を略す、……五二五
八月二十七日　義熙、美作遠江加賀越中の地を常在光寺に寄す、……五三四
十一月十二日　越前以下十五國に命し、例に依り采女料を進めしむ、……五三五

明應二年紀元二千百五十三年……五三六
四月十八日　妙傳寺日敎寂す、……五三六
六月二十八日　細川政元、大將軍義材を小豆島に流さんとす、是夜、義材、脫して越中に走り、神保長誠に投ず、……五三六
明應三年紀元二千百五十四年……五四七
七月十七日　前將軍義材、越中にあり、將に京に入らんとし、命を紀伊の諸寺に傳へて力を効さしむ、……五四七
九月二十一日　前將軍義材、兵を越中に擧ぐ、……五四八
明應六年紀元二千百五十七年……五五二
九月　前將軍義材、將に越中より京師に入らんとす、果さず、……五五二
明應七年紀元二千百五十八年……五五三
九月二日　前將軍義材、上洛を圖り越中を發し、是日、越前に至り、守護朝倉貞景に依る、……五五三
後柏原天皇
文龜元年紀元二千百六十一年……五五七
正月五日　瑞泉寺豐蔣寂す、……五五七
永正三年紀元二千百六十六年……五五八
四月十六日　越中一向宗徒侵奪する所の地を、其主に還さんことを請ふ、幕府、社寺公卿に令して之を收めしむ、……五五八
七月十五日　加賀、能登、越中の一向宗徒、兵を合せて越前に入る、……五五九
九月十九日　越後の守護上杉房能、長尾能景をして越中に入り、一向宗徒を伐たしむ、能景、神保、遊佐等と逆臺寺に戰ひ、是日、又般若野に戰ひ、遂に敗死す、……五六〇
十月十日　越中の一向宗徒、越前の豐原寺を襲ふ、……五六六
永正六年紀元二千百六十九年……五六六
七月二十八日　上杉顯定等、武藏上野の兵を率ゐて越後に入り、長尾爲景を討つ、爲景敗れて越中に走る、……五六六
永正十二年紀元二千百七十五年……五七二
四月二十四日　光嚴寺宗洋寂す、……五七二
後奈良天皇

享祿元年紀元二千百八十八年
三月二十一日　土肥平右衛門尉二尊院領富山柳町を違亂す、是日幕府之を停止し寺家をして所務を全くせしむ、……五七四
天文十四年紀元二千二百五年
四月九日　權大納言德大寺實通般若野に來り害に遇ふ、……五七五
正親町天皇
永祿二年紀元二千百十九年
是歲　神保光氏礪波郡本願寺派の諸寺を攻む、……五七八
永祿三年紀元二千百二十年
三月三十日　上杉輝虎椎名康胤を援けて神保良春を增山城に攻む、……五七九
十月十七日　武田信玄越中の一向宗徒に書を送りて輝虎の背後を窺はしむ、……五七九
是歲　椎名井口、櫻田、婦負、新川兩郡の地を爭ふ、……五八〇
永祿七年紀元二千二百二十四年
八月二十三日　椎名康胤賀積三十俵の地を常泉寺に寄進す、……五八〇
永祿八年紀元二千二百二十五年
六月　武田信玄の屬將山縣昌景兵を率ゐて越中に入る、……五八一
永祿九年紀元二千二百二十六年
五月　輝虎兵を率ゐて越中に入り諸城邑を攻略す、……五八四
永祿十年紀元二千二百二十七年
五月十八日　信玄越中に入り遂に國境を巡檢す、……五八五
永祿十一年紀元二千二百二十八年
三月十六日　輝虎越中に來る、本庄繁長の叛を聞き軍を班す、……五八七
四月六日　信玄輝虎の越中を攻擊せしを聞き長延寺實了を遣はし、上田石見に說き其徒を援けしめんとす、……五八七
七月十六日　椎名康胤本願寺に通じて輝虎に背き又欵を信玄に送る、……五八八
永祿十二年紀元二千二百二十九年
九月　輝虎越中に入り椎名康胤を攻む、……五九〇
元龜元年紀元二千三百三十年
十二月十七日　謙信明春軍を越中に出ださんとし戰捷を祈る、……五九七

元龜二年（紀元二千二百三十一年）

三月十八日　謙信兵を率ゐて越中に入り、富山城以下數城を陷れ、鹽屋秋貞等を降し、遂に軍を班す、……五九九

元龜三年（紀元二千二百三十二年）

六月十五日　加賀・越中の一向宗徒等、上杉氏の兵と吳服山に戰ひて之を破る、是日、謙信、瑞泉・安養二寺を滅さんことを祈る、……六〇四

八月十八日　謙信、越中に入り、加越の諸族及び一向宗徒を擊ち、遂に富山城を圍む、……六一二

九月十七日　飛騨將江馬輝盛、越中に來りて謙信に謁す、……六一三

十一月二十日　織田信長、書を謙信に寄せ、富山城兵の降を納れ、兵を信毛間に出だして信玄を挾擊せんことを勸む、……六二八

天正元年（紀元二千二百三十三年）

三月五日　富山城兵復背く、謙信之を攻め、尋て兵を諸城に置き、師を班へす、……六三三

是歲　善德寺、福光より城端に移る、……六三五

天正二年（紀元二千二百三十四年）

四月十七日　越中一向宗徒、糧食を本願寺に贈る、是日、顯如、報書して之を嘉みす、……六三六

天正四年（紀元二千二百三十六年）

三月十七日　謙信、越中に入り、是日、神通川を渡る、……六三八

九月八日　謙信、栂尾・增山の二城を陷れ、之を栗林政賴に報す、……六四七

天正六年（紀元二千二百三十八年）

四月七日　信長、佐々長秋に命じ、神保長住を助けて、越中に入らしむ、……六四七

九月二十四日　信長、齋藤新五郎を遣はして、越中を略せしむ、……六四九

十月四日　齋藤新五郎、河田豐前守・椎名小四郎等を擊ちて之を破る、……六五〇

天正七年（紀元二千二百三十九年）

十月二十九日　神保長住、馬を信長に遺る、……六五四

是歲　信長、成政を越中に封す、成政、富山城に徙る、……六五四

天正八年（紀元二千二百四十年）

四月十一日　神保長住、使を信長に遣はして馬を獻す、……六五五

十五日　本願寺顯如、紀州雜賀より書を、勝興寺及其宗徒に遣りて、信長と婚和せし旨を告く、……六五五
六月八日　新川郡立山溫泉を發見す、……六六〇
十一月　成政、神通川渡舟の制を定む、……六六一
天正九年（紀元二千二百四十一年）
二月二十日　成政、廩米を有澤圖書助齋藤豐左衛門に授く、……六六二
三月二十四日　松倉城主河田長親、景勝と軍を合して、小井手城を攻む、信長、佐々・神保・前田・柴田の諸將をして之を援はしむ、景勝兵を收めて還り、成政守山城に入る、……六六四
四月　成政、婦負郡五艘村渡舟の制を定む、……六六九
六月　勝興寺、兵燹に遭ふ、是に至り、瑞泉寺も亦兵火に罹る、……六七三
八月三日　成政、埴生八幡宮に參百俵の田を寄進す、……六七四
十月二日　信長、能登を以て前田利家に賜ひ、七尾城に治せしむ、……六七五
九日　神保長住、蓮華寺及ひ放生津八幡領町に制札を掲く、……六七七
二十九日　成政、黑部產馬を信長に獻す、……六八〇
天正十年（紀元二千二百四十二年）
二月九日　織田氏の兵越中に入る、越中の守將須賀盛能秋山定綱、之を上杉景勝に報す、是日、景勝、上條政繁等五將をして赴援せしむ、……六八一
二十五日　景勝、書を大關親憲に與へて、織田氏の兵の越中に入らんとする虛實を探らしむ、……六八二
三月十一日　小島六郎左衛門等、景勝に通し、兵を擧けて富山城を奪ふ、柴田・佐々・前田の諸將攻めて之を復し、遂に魚津・松倉の兩城を圍む、……六八三
四月八日　善德寺、窃に景勝に通す、是日、景勝、書を遣りて兵を擧けしむ、……六八五
十三日　魚津城將中條景泰等、景勝の來援を乞ふ、景勝先つ上條義春等を遣はして景泰を勵め、赴援を俟たしむ、……六九〇
二十三日　中條景泰等、書を景勝に致して危急を告く、……六九二

二十六日　越後頸城郡落水城將秋山盛能、越中に入り境を保つ、景勝、書を與へて之を固守せしむ、……六九九
五月九日　温井景隆、景勝の命に從ひ、越中を援ひ能登に進まんとす、是日、景勝、書を與へて重賞を約す、……七〇一
十五日　景勝、越中に入り天神山に陣す、……七〇二
六月四日　景勝、森長可の越後を侵せしを以て軍を旋す、柴田勝家、中條景泰を誘殺す、是日、京師の變報至る、勝家長可等、皆罷め去る、……七〇五
二十三日　畠山氏の臣、温井景隆、三宅長盛等、上杉氏の兵を假りて能登を襲はんとし、是日、越中の妻良浦に上り、石動山に入る、後利家及佐久間盛政に敗らる、……七一五
七月三日　景勝、信濃に入らんとし、佐々成政の盧に乘して兵を出さんとするを聞き、岩井信能等を信濃より招きて、春日山を守備せしむ、……七一九
五日　越中の士神保昌國、齋藤信則等、書を樋口兼續に遣り、景勝の來援を乞ふ、……七二一
八月　成政、土肥政繁を弓庄城に攻む、……七二三
九月四日　加賀の士蜷川新七郎等、景勝に通し越中の國境に屯す、景勝、答書を與へて赴援を待たしむ、……七二八

天正十一年（紀元二千二百四十三年）

二月七日　豐臣秀吉、石田三成等に命して、書を上杉氏の家臣に贈り、景勝をして兵を越中に出さしむ、……七三〇
四月二十五日　秀吉、加賀を徇ふ、成政降を乞ふ、秀吉、利家に加賀の石川・河北二郡を加へ、金澤城に治して越中を鎮せしむ、……七三二
八月二十日　成政、婦負・新川二郡の地を佐々與左衛門に與ふ、又立山祠に寄田して、祭祀を懈ること勿らしむ、……七三四

天正十二年（紀元二千二百四十五年）

三月十三日　秀吉、織田信雄と隙を生し、將に軍を尾張に出さんとし、書を丹羽長秀に贈り、利家を援けて成政に備へしむ、……七三八
八月二十八日　成政、信雄に應せんとし、利家を欺きて婚を約す、後利家北

の詐を懲り、村井長頼をして朝日山に備へしむ、成政、佐々平左衛門を遣りて之を攻む、……七三九
是月　成政、神保氏張をして、能登德丸城を襲はしめんとす、氏張、砦を勝山に築く、前田良繼等來り之を攻む、……七四七
九月八日　利家、書を秀吉に遣りて成政の反狀を報ず、是日、秀吉、復書して丹羽長秀の來援を待たしむ、……七四八
十一日　成政、大舉して下河非に至り、神保氏張をして川尻に軍せしめ、自ら坪井山に次し、其部將をして末森城を圍ましむ、城將に陷らんとす、利家來り援ひ、成政大に敗れ、鳥越城を過き、守兵を入れて去れり、……七五〇
十月十四日　利家、鳥越城を復せんとして之を攻め、火を放ちて還る、……七九三
是月　景勝、越中に入り境城を攻め、進みて滑川に至り、火を放ちて歸る、……七九五
是月　成政の將佐々平左衛門、津幡の守將前田秀繼と、俱利伽羅の龍峯に戰ふ、……八〇〇

十一月八日　利家、書を成政の屬將阿尾城主菊池武勝に遣りて、之を誘ふ、……八〇一
十四日　成政、勝興寺の還住を聽し、神保氏張、古國府の地を寄進して條制を榜示す、……八〇二
十二月二十五日　成政、立山を踰え信濃を經て濱松に赴き、德川家康及ひ信雄に說きて、秀吉を擊たんことを以てす、……八〇四
是歲　神通川出水、水勢東に變す、……八一四

天正十三年（紀元二千二百四十五年）

二月二十四日　村井長頼、蓮沼を襲ひて之を火く、成政の將、出てゝ之を拒く、長頼大に之を破る、……八一五
三月二十一日　成政加賀に入り應栖を侵す、村井長頼赴き援ふ、利家も亦出て陣す、成政遁れ去る、……八二五
四月八日　利家、鳥越城を攻む、……八二八
十二日　菊池武勝、成政に背きて利家に降る、利家之に赴きて其城を收む、成政、出て戰はんとせしも及はず、遂に軍を旋す、……八三四

十八日　成政、鳥越俱利迦羅二城の保つべからざるを度りて、守兵を撤せり、利家之を取り、家臣をして分ち守らしめ、又今石動に城きて、前田繼長をして之に據らしむ、……八四三
五　月　佐々平左衛門等、今石動城を襲ふ、守將前田繼長、拒き戰ひて之を卻く、……八四六
六月二十四日　神保氏張、氷見を略し、進て阿尾城に薄る、前田利益出て、之を拒く、村井長頼來り援ふ、……八四九
八月二十日　秀吉、大軍を率ゐて越中に入り、呉服山に陣す、成政出て降る、秀吉、加賀能登越中を利家に與へ、越中の新川一郡を成政に與ふ、……八五五
閏八月二十五日　利長、射水郡二上村渡舟の制を定む、……八八六
十月十四日　礪波郡蓮臺寺村等、綿及絲を領主に納む、……八八七
十一月二十九日　利家を左近衛少將と爲し、筑前守に任す、……八八八
是歳　利家、始めて封内の丈量を命す、……八九三

正月十五日　成政、鶴を獻し、尋て又銀を獻す、……八九四
三　月　礪波郡芦原村を、今石動と改稱す、……八九五
六月十五日　利長、越中の田百二十苞を、伊勢大神宮に奉す、……八九六
八月十三日　利長、礪波郡篠川村の市日を定む、……八九七
九月二十一日　利長、埴生八幡社へ六十俵の地を寄進して、武運を祈る、……八九七
十月十二日　今石動城主前田利秀、田五町を高德寺に寄進す、……八九八

補遺

文武天皇

大寶二年（紀元千三百六十二年）
三月十七日　越中國四郡を分ちて越後國に屬す、……一

桓武天皇

延暦二十三年（紀元千四百六十四年）

六月十日　越中國を上國と定む條……三
正親町天皇
天正八年（紀元二千二百四十年）……
四月十五日　本願寺顯如、書を勝興寺及ひ宗徒に遣る條……四

挿入圖畫文書

一天平寶字三年東大寺開田越中國射水郡須加野地圖……五六——五七
一越中國印……八二——八三
一游佐慶親書狀……五六〇——五六一
一椎名康胤寄進狀……五八〇——五八一
一武田信玄勝頼連署書狀……六一八——六一九
一本願寺顯如書狀……六五六——六五七
一神保長住制札……六八〇——六八一
一上杉景勝書狀……六九〇——六九一
一神保氏張書狀……八〇二——八〇三
一豐臣秀吉書狀……八五八——八五九
一本願寺教如書狀……（補遺）三——四

（目次終）

越中史料　卷一

神代

越洲の名、始めて見はる、

〔日本書紀〕　伊弉諾尊、伊弉冊尊、立於天浮橋之上、共計曰、底下豈無國歟、廼以其矛鋒滴瀝之潮、凝成一島、名之曰磤馭盧嶋、二神之磤矛指下而探之、是獲滄溟、其矛鋒滴瀝之潮、凝成一島、名之曰磤馭盧嶋、二神於是降居彼島、因欲共爲夫婦、產生洲國、略○中於是陰陽始遘合爲夫婦、及至產時、先以淡路洲爲胞、意所不快、故名之曰淡路洲、廼生大日本豐秋津洲、次生伊豫二名洲、次生筑紫洲、次雙生隱岐洲與佐度洲、世人或有雙生者、象此也、次生越洲、次生大洲、次生吉備子洲、由是始起大八洲國之號焉、即對馬島壹岐島及處處小島、皆是潮沫凝成者矣、亦曰水沫凝而成也、

〔參考〕

〔日本書紀通證〕　二　兼良曰、越洲彼地有坂、名曰角鹿、行人必踰此坂入越絕、故名曰越也、後分爲五國、北陸道、三越、加賀、能登、是也、成朮曰、和銅五年割陸奥越後、始置之、曰越也、後分爲五國、出羽國、則出羽亦半爲越地、今按夫水槻其外、謂之洲、則八洲各

熙別島、恐不熙分陸地、方山嶽爲、二洲也、今也越洲既接秋津洲中、且以鹽角鹿坂爲名、俱爲可疑、或謂北越地、名也、蓋蝦夷初見其北、初雖通、故立界限、亦得此名、

〈古事記傳〉十一　高志國は越國なり、出雲國神門郡なる古志には非す、後に越前加賀能登越中越後などと分れつれども、歌などにはなべて越とよむなり、さて此國名は、越後國に古志郡あれば、他の例に其より出たるにや、名義は知がたし、山を越て行國なる故のなとこそいへ、古志は今物越なり、若然らは古延とこそ云べけれ、凡て自越るなれば古延とも云なり、古須と云は誤なり、古さるこなし、又雷紀神代卷に、八島の一なる越洲とあり、古須と云は誤なり、古さるこなし、又雷紀神代卷に、八島の一なる越洲とあり、越國は其へ往來ふ道なる故の名と云もいたく強説なり、

〈陸路廻記〉上　北陸は若狹越前越中越後加賀能登佐渡の七國なり、されと、ふるく、古志の國といへりしは、越前越中加賀能登越後の五國にやありけん、さるよしは、古事記に、八千矛神の出雲國より高志の沼河比賣を婚ひたまふことみえて、この沼河は地名もてつけたまへる御名なるを、今も越後の頸城郡に沼河ありて、和名抄に載せたり、これ越後の古志の國なりし證にて、國造本紀に、古志國造あるも、このあたりを掌りし人なりけん、古事記傳に、古志乃國名は越後に古志郡あれは、そこよりいてたるなるへし、名義は知かたしといへり、越の栞なといふ書ともに、古志といふ名義を解けるは、みなひかことなれは、とりかたし、かくて、皇都より北陸道をかよふに、若狹をは過す、東山道の近江をよこきりて、越前に入る、そこに道口といふ地名今もあり、越路の道の口なれは、かく、いへるにて、和名抄に越前を古之乃三知乃久知とよめるこれなり、古事記の訶志比宮の件に高志前角鹿と、みえたる、當時、いまた、越前といふ國名のありしにはあらねと、近江より入る道の口なるよしの號にて角鹿は卽て敦賀なるを、その敦賀の近き所に道口といふ里はあるなり、

崇神天皇

十年癸巳　紀元五百七十三年

九月丙戌朔

九日、甲午、大毘古命を遣はして、高志道を撫綏せしむ、

崇神天皇十年

〔古事記〕中　此之御世、○崇神天皇大毘古命者、遣高志道、其子建沼河別命者、遣東方十二道而、令和平其麻都漏波奴人等、又日子坐王者、遣旦波國、令殺玖賀耳之御笠、故大毘古命、罷往於高志國之時、服腰裳少女立山代之幣羅坂而、歌曰、古波夜、美麻紀、伊理毘古波夜、美麻紀、伊理毘古波夜、意能賀袁袁、奴須美斯勢牟登、斯理都斗用、伊由岐多賀比、麻幣都斗用、伊由岐多賀比、宇迦迦波久、斯良爾登、美麻紀、伊理毘古波夜、於是大毘古命思怪、返馬問其少女曰、汝所謂之言、何言、爾、少女答曰、吾勿言、唯爲詠歌耳、即不見其所如而忽失、故大毘古命、更還參上、請於天皇時、天皇答詔之、此者爲在山代國、我之庶兄建波邇安王、起邪心之表耳、伯父、與軍行、即副九邇臣之祖、日子國夫玖命而、遣時、即於九邇坂居忌瓮而罷往、○中略如此平訖、參上覆奏、故大毘古命者、隨先命而、罷行高志國、爾、自東方所遣建沼河別、與其父大毘古、共往遇于相津、故其地謂相津也、是以各和平所遣之國政而、覆奏、

〔日本書紀〕五　十年秋七月丙戌朔、己酉、○二十四日詔群卿曰、導民之本、在於敎化也、今既禮神祇、災害皆耗、然遠荒人等、猶不受正朔、是未習王化耳、其選群卿、遣于四方、令知朕意、九月丙戌朔、甲午、○九日以大彦命遣北陸、武渟川別遣東海、吉備津彦遣西道、丹波道主命遣丹波、因以詔之曰、若有不受敎者、乃擧兵伐之、既而共授印綬、爲將軍、十一年夏四月壬子朔、己卯、○二十四日、○八日道將軍以平戎夷之狀奏焉、

○月日は日本書紀に從ふ、

〔參考〕

〔日本書紀〕四　大彦命、是阿倍臣、膳臣、阿閉臣、狹狹城山君、筑紫國造、越國造伊賀臣、凡七族之始祖也、○市入命の高志國造となり事は成務天皇の條に見ゆ、

〔大日本史〕八十六　大彦命、崇神帝十年九月、受印綬、爲將軍、與其子武渟川別、及彦五十狹芹彦、丹波道主、綏懷四方、稱四道將軍、大彦赴北陸、往過和珥坂、○本書註一云、山背平坂有少女唱歌、歌畢忽不見、大彦意異、之歸以狀聞、倭迹迹日百襲姬言於帝曰、此武埴安彦將反之徵也、於是留諸將軍、議之、武埴安彦果反、與妻吾田媛分軍進、自兩道、帝命大彦及彦國葺討之、大彦等邀武埴安彦於山背、時以忌瓮鎭坐於和珥武鑪坂、乃率精兵軍那羅山、進與武埴安彦夾輪韓河而挑戰、武埴安彦臨河發矢、彦國葺射殺武埴安彦、乘潰追破之河北、餘衆悉降、十月、大彦等奉詔各往四道、平定戎夷、日本紀大彦有子、曰武渟川別、曰彦背立大稻腰命、曰波多武彦命、○本書或爲大彦孫曰紐結命、姓氏錄女曰御間城姬、爲崇神皇后、武渟川別、崇神帝十年九月、爲將軍、赴東海、日本紀、與父大彦、

會于相津、古記　事六十年、與彦五十狹芹彦奉命誅出雲振根、垂仁朝爲大夫、日本紀　彦背立大稻腰子曰、彦屋主田心命、

垂仁天皇

二十三年甲寅　紀元六百五十四年

天皇山邊大鵠を遣し鵠を捕へしめ給ふ、大鵠追ふて高志國和那美の水門に到りて之を獲たり、

〔古事記〕中　故率遊其御子之狀者、在於尾張之相津二俣榲作二俣小舟而持上來以、浮倭之市師池、輕池、率遊其御子、然是御子八拳鬚至于心前、其事登波受、故今聞高往鵠之音、始爲阿蘇登比、爾遣山邊之大鵠、令取其鳥、故是人追尋其鵠、自木國到紀伊國、亦追越紀伊國、即到旦波國、多遲麻國、追廻東方、到近淡海國、乃越三國野、自尾張國傳以、追科野國、遂追到高志國、而於和那美之水門張網、取其鳥、而持上獻、故號其水門謂和那美之水門也、

〔日本書紀〕六　冬十月乙丑朔、壬申、日○八天皇立於大殿前、譽津別皇子侍之、時有鳴鵠度大虛、皇子仰觀鵠曰、是何物耶、天皇則知皇子見鵠得言、而喜之、詔左右曰、誰能捕是鳥獻之、於是鳥取造祖天湯河板擧奏言、臣必捕而獻、即天皇敕湯河板擧、板擧抱雛云、曰汝獻是鳥、必敦賞矣、時湯河板擧遠望鵠飛之方、追尋詣出雲、而捕獲、或曰、得于但馬國、

○月日は日本書紀に從ふ、但書紀は天湯河板擧出雲に於て捕獲すに作る、

〔參考〕

〔古事記傳〕二十五　高志、舊印本又一本などに、但馬と作るは誤なり、今は眞福寺本延佳本に依れり、科野より但馬に到らむは、國次いたく遠へるうへに、既に多遲麻國に到ることはあり、又但馬と作る字も、此記の例に非ず、伊邪河宮段、明宮段などに見え、式に彼國に、多遲麻とのみこそ書たれ、抑此誤は、書紀に或曰得于但馬國と見え、式に彼國に和奈美神社のあるなどに依て、後に多遲麻とある、其とも知らぬ者の、なまさかしらに、改めつるものなり、水垣宮段にも此誤ある、其も此處よりうつれるさかしらと見えたり、此國上卷に出たり、式に、越中國婦負郡白鳥神社あり、和名抄に、同國新川郡鳥取郷あり、和那美之水門門字諸本に河と作るは誤なり、今は一本に依れり、は、高志の內に、何國何郡にあるにか、他に物に見えたることなし、今此名の地は無きか、國人に尋ぬべきなり、今越中國射水郡にくゞの浜と云あり、そのあたりに鳥取村と云ありとぞ、

〔大日本史〕三百三　射水郡、○中略　有奈具海、和那美水門、○今久久湊是、有鳥取地、○今鳥取村垂仁皇子譽津別命、年壯不能言、偶觀飛鵠、曰、是何鳥也、帝勅天湯河板舉、捕之、追至越國、獲於和那美水門、獻之、因定鳥取部、卽此、○古事記

天皇の時、大若子命、勅を奉じて、阿彦の亂を平ぐ、

〔延喜十四年官進度會神主氏本系帳〕○皇字沙汰文所引又見豐受大神宮禰宜補任次第及度會氏系圖　大若子命一名大幡主命

右命、天牟羅雲命子、天波與命子、天日別命第二子、彦國見賀岐建與來命第一子、彦由都久禰命第一子、彦楯津命第一子、彦久良爲命第一子也、越國荒振凶賊阿彦在天、不從皇化、取平仁罷止詔天、標劒賜遣支、卽、幡主、罷行取平天、返事白時、天皇歡給天、大幡主名加給支、垂仁天皇卽位二十五年丙辰、皇太神宮鎭座伊勢國五十鈴河上之時御供仕奉、爲大神主也、

景行天皇

二十五年乙未　紀元七百五十五年

七月　庚申朔

三日、壬午、武內宿禰を遣はして、北陸及び東方諸國を巡視せしむ、

〔日本書紀〕七　二十五年秋七月庚辰朔壬午、○三日遣武內宿禰令察北陸及東方諸國之地形、且百姓之消息也、

成務天皇

市入命を高志國造となし、大河音足尼を伊彌頭國造となす、

〔舊事本紀〕十高志國造　志賀高穴穗朝御世、阿閉臣祖屋主男心命三世孫、市入命、定賜國造、

〔舊事本紀〕十伊彌頭國造　志賀高穴穗朝御世、宗我同祖建內足尼孫、大河音足尼、定賜國造、

○天皇古命の高志道に赴きしこと、崇神天皇十年の條に在り、參看すへし、

〔参考〕

〔古事記〕中　大倭根子日子賦斗邇命（オホヤマトネコヒコフトニノミコト）坐黑田盧戸宮（クルダノホドノヒロトノミヤニマシマシテ）治天下也、此天皇、略　娶意富夜麻登玖邇阿禮比賣命（オホヤマトクニアレヒメノミコト）生御子夜麻登登母母曾毘賣命（ヤマトトモモソヒメノミコト）次日子刺肩別命、中○略　日子刺肩別命者、高志之利波（越中郡名礪波臣、豐國之國前豐後郡名國崎臣、五百原（駿河郡名庵原君、角鹿（越前郡名敦賀海直之祖也、

〔古事記傳〕二十一　高志利波臣、高志は越國なり、上卷に見ゆ、利波は和名抄に、越中國礪波郡止奈美（となみ）これなり、越後國蒲船郡に、利波郷もあれど其には非し、萬葉十七に、刀奈美夜麻十八に、刀奈美能勢（となみのせ）十九に、利波山（となみやま）と、加賀國礪波山（かがのくにとなみやま）とあり、一代要記、綏紀十七、廿八、卅五に、越中國人、利波臣志留志と云人見ゆ、此人東大寺の事に功ありて、越中員外介になり、從五位上に叙し、後に伊賀守になれり、

仲哀天皇

元年壬申　紀元八百五十二年

閏十一月乙卯朔

四日、戊午、越國、白鳥四隻を貢す、

〔日本書紀〕八　元年、○略　中　冬十一月乙酉朔、詔群臣曰、朕未速于弱冠而父王既崩之、乃神靈化白鳥上天、仰望之情、一日勿息、是以冀獲白鳥養之於陵域之池、因以觀其鳥欲慰願情、則令諸國俾貢白鳥、閏十一月乙卯朔、戊午、○日　四　越國貢白鳥四隻、於是送鳥使人宿苑道河邊、時蘆髮蒲見別王視其白鳥而問之曰、何處將去白鳥也、越人答曰、天皇繼父王而將養狎、故貢之、則蒲見別王謂越人曰、雖白鳥而燒之則爲黑鳥、仍强之奪白鳥而將去、爰越人參赴之請焉、天皇於是惡蒲見別王無禮於先王、乃遣兵卒誅而矣、蒲見別王則天皇之異母弟也、

〔参考〕

〔日本書紀通證〕十三　越國（神名式越中國婦負郡白鳥神社）

〔大日本史〕二百五十九　婦負郡○略　中　白鳥神社、○今在三田村　相傳祀日本武尊、傳說仲哀帝時越國獲白鳥於此地獻之、

〔三州志〕一　來因概覽　仲哀代十四元年壬申ニ閏十一月、越國白鳥四隻ヲ貢ストアリ、京周按ルニ「神名式」ニ越中國婦負郡ニ白鳥神社アリ、神社ハ今猶長澤鄉吳服村領ニ存在ス、此社邊ノ山ヲ白鳥峰ト名ク、又按ルニ聖武帝天平十一年正月亦越中國白鳥ヲ獻ス、

敏達天皇

二年癸巳　紀元千二百三十三年

五月丙寅朔

三日、戊辰、高麗の使人越海に至り、船破れ溺死するもの衆し、

〔日本書紀〕二十　二年夏五月戊辰、○三日高麗使人泊于越海之岸、破船溺死者衆、朝廷猜頻迷路、不嬰放還、仍勅吉備海部直難波、送高麗使、秋七月乙丑朔、於越海岸難波與高麗使等相議、以送使難波船人大島首磐日、狹丘首間狹、令乘高麗使船、以高麗二人、令乘送使船、如此互乘以備奸志、俱時發船、至數里許、送使難波乃恐畏波浪、執高麗二人、擲入於海、八月甲午朔、丁未、○十四日送使難波還來、復命曰、海裏鯨魚大有、遮嚙船、與檝櫂難波等恐魚呑船、不得入海、天皇聞之、識其讒語、駈使於官、不放還國、

三年甲午　紀元千二百三十四年

五月庚申朔

五日、甲子、高麗の使人越の海岸に泊り、尋て上京す、

〔日本書紀〕二十　三年夏五月庚申朔、甲子、○五日高麗使人泊于越海之岸、秋七月己未朔、戊寅、○二十日高麗使人入京奏曰、臣等去年相逐送使罷歸於國、臣等先至臣蕃、臣蕃即准使人之禮、禮饗大島首磐日等、高麗國王別以厚禮禮之、既而送使之船至、今未到、故更謹遣使人并磐日等、請聞臣使不來之意、天皇聞即數難波罪曰、欺誑朝廷、一也、濫殺隣使二也、以茲大罪不合放還、以斷其罪、

崇峻天皇

二年己酉　紀元千二百四十九年

七月壬辰朔

一日、壬辰、阿倍臣、越の國境を觀察す、

〔日本書紀〕二十一　二年秋七月壬辰朔、遣近江臣滿於東山道、使觀蝦夷國境、遣完（○完集解に作る）央人臣鴈於東海道、使觀東方濱海諸國境、遣阿倍臣於北陸道、使觀越等諸國境、

〔日本書紀通證〕二十六　北陸道（所管國若狹・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡）

○齊明天皇四年阿倍比羅夫、蝦夷を伐つ條參看すへし、

皇極天皇

元年壬寅（紀元千三百二年）

九月（癸丑朔）

三日、乙卯、近江及ひ越の丁を發して、百濟の大寺を造らしむ、

〔日本書紀〕二十四 九月癸丑朔、乙卯、○三天皇詔大臣曰、朕思欲起造大寺、宜發近江與越之丁、（百濟大寺）

〔扶桑略記〕四 九月、詔令造百濟寺、今大安寺是也、

〔日本書紀通證〕二十九 百濟大寺（拾芥抄曰、大安寺本名百濟寺、元慶四年大安寺高市郡號曰高市大官寺、三綱是文曰、天武天皇以十市郡百濟大寺遷立）

二十一日、癸酉、越邊の蝦夷內附す、

〔日本書紀〕二十四 癸酉○二十一日、越邊蝦夷數千內附、

齊明天皇

四年戊午（紀元千三百十八年）

四月（癸丑朔）

越國守阿倍比羅夫、蝦夷を伐ち、遂に肅愼を征す、

〔日本書紀〕二十六 四年夏四月、阿倍臣（闕名）率船師一百八十艘伐蝦夷齶田浮代二郡蝦夷望怖乞降、於是勒軍陳船於齶田浦、齶田蝦夷恩荷進而誓曰、不爲官軍、故持弓矢、但奴等性食肉、故持、若爲官軍、以儲弓矢、齶田浦神知矣、將清白心仕官朝矣、仍授恩荷以小乙上、定渟代津輕二郡々領、遂於有間濱召聚渡島蝦夷等大饗而歸、○中略秋七月辛巳朔、甲申、蝦蝦二百餘詣闕朝獻、饗賜贍給有加於常、仍授柵養蝦蝦二人位一階、渟代郡大領沙尼具那小乙下（或所云授位二階使檢戶口）少領宇婆左建武、勇健者二人位一階、別賜沙尼具那等錦旗二十頭、皷二面、弓矢二具、鎧二領、授津輕郡大領馬武大乙上、少領靑蕪小乙下、勇健者二人位一階、別賜馬武等錦旗二十頭、皷二面、弓

矢二具、鎧二領授都岐沙羅柵造（闕名）位二階、判官位一階、授渟足柵造大伴君稻積小乙下、又詔渟代郡大領沙奈具那捴覆蝦夷戸口與虜戸口、

是歲、（○四年）越國守阿倍引田臣比羅夫討肅慎、獻生羆二、羆皮七十枚、

五年三月甲午、（○十七日）甘檮丘東之川上、造須彌山而饗陸奥與越蝦蛸（皆此云柯之川上此云菓播羅）、

是月遣阿倍臣（闕名）率船師一百八十艘討蝦夷國、阿倍臣簡集他田渟代二郡蝦蛸二百四十一人、其虜三十一人、津輕郡蝦蛸一百十二人、其虜四人、膽振鉏蝦夷二十人於一所而大饗賜祿、（膽振鉏、伊浮梨奚陛、此云即以船一隻與五色綵帛祭彼地神、至肉入籠時問菟蝦夷膽鹿島、菟穂名二人進曰、可以後方羊蹄爲政所焉、（肉入籠、此云之之梨姑、問菟、此云塗、吐字、菟穂名、此云字保那、後方羊蹄、此云斯梨婆之、政所、宣蝦夷郡乎、）隨膽鹿島等語、遂置郡領而歸、授道奥與越國司位各二階、郡領與主政各一階、（或本云阿倍引田臣比羅夫、與肅慎戰而歸、獻虜卅九人、）

六年二月、遣阿倍臣（闕名）率船師二百艘伐肅慎國、阿倍臣以陸奥蝦夷、分乘己船、到大河側、於是渡島蝦夷一千餘屯聚海畔、向河而營、々中二人進而急叫曰、肅慎船師多來將殺我等之故願欲濟河而仕宦矣、阿倍臣遣船喚至兩箇蝦蛸、問賊隱所與其船數、兩箇蝦蛸便指隱所曰、船二十餘艘、即遣使喚而不肯來、阿倍臣乃積綵帛兵鐵等於海畔而令貪嗜肅慎乃陳船師、繫羽於木、擧而爲旗、齊棹近來、停於淺處、從一船裏出二老翁、廻行熟視所積綵帛等物、便換著單衫、各提布一端、乘船還去、俄而老翁更來、脫置換衫、幷置提布、乘船而退、阿倍臣遣數船使喚、不肯來、復於弊賂弁島食頃乞和、遂不肯聽、（弊賂弁島、度之別也、）據己柵戰、于時能登臣馬身龍爲敵被殺、猶戰未倦之間、賊被殺己妻子、

〔參考〕

〔大日本史〕（一百九）阿倍比羅夫、或稱阿倍引田臣、（○本書齊明紀、往往書阿倍臣、闕名、按四年書越國守阿倍引田臣比羅夫討肅慎、五年書遣阿倍臣率船師一百八十艘伐蝦夷國、及還、授軍、授道奥越國司位各二階、而本書註引一說、載阿倍引田臣、比羅夫與肅慎戰而歸、參互考之、蓋非別人也、又按崇峻紀所載、遣阿倍臣於北陸者、聖德太子傳曆以爲崇峻帝二年勅觀察北陸枚吹、枚吹、比羅夫音訓相通、是亦可以爲證、因定爲一人、）

道諸國境、齊明帝爲越守、四年承勅、率船師一百八十艘伐蝦夷、鬱田、渟代、二郡蝦夷乞降、比羅夫、遂定渟代、津輕郡領、會渡島蝦夷等大饗而歸、又伐肅慎、獲生羆二、羆皮七十張、歸而獻之、明年再討蝦夷、簡集他田、渟代、津輕三郡、及膽振鉏蝦夷三百七十三人、降虜三十五人、饗賜之、以船一隻與五色綵帛、祭其土神、進至肉入籠、有問菟蝦夷膽鹿島、菟穂名、進曰、（○按膽鹿島、菟穂名者、二人名也、）可以後方羊蹄爲政所、比羅夫從之、因置郡領、遂伐肅慎、虜四十九人、以歸、（遂伐肅慎以下本書註引一說）賜比羅夫及道奥國司位各二階、六年率戰艦二百、伐肅慎、將陸奥蝦夷、到大河側、渡島蝦夷千餘、向河而營、蝦夷二人出營

呼曰、肅愼舟師多來、將殺我、願渡河相屬、比羅夫命船召之、問賊所伏、與其舟數、蝦夷指其處、且曰、舟二十餘艘、因遣使召賊、賊不肯來、乃積綵帛、兵鐵於海畔、餌之、賊繫羽爲旗、舟師來近、既而乞和、比羅夫不聽、進攻其柵、能登馬身龍爲賊所害、比羅夫終破賊、虜五十餘人、天智帝稱制、與前將軍阿曇比羅夫等、救百濟、時爲大華下後將軍、尋與前將軍上毛野稚子等、討新羅、與唐兵戰不利、百濟諸將隨王師來投、日本紀

比羅夫、爲筑紫太宰帥、進大錦上、子宿奈麻呂、續日本紀、○日本紀、宿奈、作少、音訓相通、初稱引田朝臣、持統朝、自直廣肆、進直大肆、賜食封五十戶、日本紀　大寶中爲造大殿垣司、慶雲元年改賜姓阿倍朝臣、二年、任中納言、和銅元年、再任中納言、○前編中納言、本書無所考　帝召親王公卿於御前、褒其公平、率先百寮、授宿奈麻呂正四位上、尋爲造平城宮司長官、明年叙從三位、褒老初進正三位、至大納言、四年薨、續日本紀

天武天皇

越國を分ちて、越前・越中・越後となす、

〔大日本史〕三百三　天武帝時、分越國爲越前越中越後、日本書紀、○按越前始見持統紀、

〔參考〕

〔大日本史〕三百四　越中國、○略中　大化改新始置本國管八郡、日本書紀　續日本紀

大寶三年癸卯　紀元千三百六十三年

正月　癸亥朔

二日、甲子、高向大足を北陸道に遣はして、治績を巡省せしむ、

〔續日本紀〕三　甲子、○日二遣正六位下藤原朝臣房前于東海道、從六位上多治比眞人三宅麻呂于東山道、從七位上高向朝臣大足于北陸道、從七位下波多眞人余射于山陰道、正八位上穗積朝臣老于山陽道、從七位上小野朝臣馬養于南海道、正七位上大伴宿禰大沼田于西海道、道別錄事一人、巡省政績、申理寃枉、

慶雲三年丙午　紀元千三百六十六年

二月　乙亥朔

二十六日、庚子、越中國の神社、祈年幣帛の例に入る、

〔續日本紀〕三　是日、○二十六日庚子　甲斐・信濃・越中・但馬・土佐等國一十九社、始入祈年

幣帛例、

元明天皇

和銅二年己酉 紀元千三百六十九年 朔戊午

三月 朔戊午

五日、壬戌、越前・越中等の兵を徵發して、越後の蝦夷を征討せしむ、

〔續日本紀〕四 壬戌、〇五日 陸奥、越後二國蝦夷、野心難馴、屢害良民、於是遣使徵發遠江、駿河、甲斐、信濃、上野、越前、越中等國、以左大辨正四位下巨勢朝臣麻呂爲陸奥鎭東將軍、民部大輔正五位下佐伯宿禰石湯爲征越後蝦夷將軍、內藏頭從五位下紀朝臣諸人爲副將軍、出自兩道征伐、因授節刀并軍令、

六月 朔丙戌

九日、甲午、越中國疫あり、

〔續日本紀〕四 甲午、〇九日 上總、越中二國疫、給藥療之、

七月 朔乙卯

十三日、丁卯、越前、越中、越後、佐渡の四國をして、船一百艘を、征狄所に送らしむ、

〔續日本紀〕四 丁卯、〇十三日 令越前、越中、越後、佐渡四國、船一百艘送于征狄所、

九月 朔甲寅

二十六日、己卯、越中、越後等の國士、征役を經ること五十日已上の者には、復一年を賜ふ、

〔續日本紀〕四 己卯、〇二十六日 遠江、駿河、甲斐、常陸、信濃、上野、陸奥、越前、越中、越後等國士、經征役五十日已上者、賜復一年、

元正天皇

養老元年丁巳 紀元千三百七十七年 朔丁酉

九月 朔丁酉

十八日甲寅、越中國司等、美濃國の行在所に詣りて、風俗の雜伎を奏す、

〔續日本紀〕七　丁未、〇十一日天皇行幸美濃國、〇略　中　甲寅、〇十八日至美濃國、東海道相模以來、東山道信濃以來、北陸道越中以來、諸國司等詣行在所、奏風俗之雜伎、

養老三年己未　紀元千三百七十九年　朔戊子

七月

九日丙申、東海、東山、北陸三道の民二百戸を遷して出羽柵に配す、

〔續日本紀〕八　丙申、〇九日、遷東海、東山、北陸三道民二百戸、配出羽柵焉、

十三日庚子、始めて按察使を置き、越前國守多治比廣成をして、能登・越中・越後を管せしむ、

〔續日本紀〕八　庚子、〇十三日、始置按察使、令伊勢國守從五位上門部王管伊賀志摩二國、〇中略　令越前國守正五位下多治比眞人廣成管能登越中越後三國、

〔公卿補任〕　中納言從三位多治比眞人廣成　左大臣正二位島之五男、養老元年正月日叙正五位下、三年七月日叙正五位下廣成管能登越中越後三國、四年正月日叙正五位上、神龜元年月日從四位下、天平三年正月從四上、四年八月爲遣唐使、七年四月戊申正四上、九年八月十九日任參議、九月十三日任中納言、叙從三位、天平九年の條

聖武天皇

天平四年壬申　紀元千三百九十二年

九月　朔辛丑

五日乙巳、田口年足を越中守となす、

〔續日本紀〕十一　乙巳、〇五以從五位下田口朝臣年足、爲越中守、

天平十一年己卯　紀元千三百九十九年

正月　朔甲午

一日甲午、越中國、白烏を獻す、

〔續日本紀〕十三　十一年春正月甲午朔、出雲國獻赤烏、越中國獻白烏、

天平十三年辛巳　紀元千四百一年

三月　朔壬午

二十四日、乙巳、毎國に金光明、四天皇護國寺、法華滅罪寺を置かしむ、

〔續日本紀〕十四　乙巳、○二十四日　詔曰、朕以薄德、忝承重任、未弘政化、寡寡多慚、古之明主皆能先業、國泰人樂、災除福至、修何政化、能臻此道、頃者年穀不豐、疫癘頻至、慙懼交集、唯勞罪己、是以廣爲蒼生、遍求景福、故前年馳驛、增飾天下神宮、去歲普令天下造釋迦牟尼佛尊金像高一丈六尺、幷各一鋪、幷寫大般若經各一部、自今春已來、至于秋稼、風雨順序、五穀豐穰、此乃徵誠啓願、靈貺如響、載惶載恐、無以自寧、案經云、若有國土講宣讀誦、恭敬供養、流通此經、王者、我等四王、常來擁護、一切災障、皆使消殄、憂愁疾疫、亦令除差、所願遂心、恒生歡喜者、宜令天下諸國各敬造七重塔一區、幷寫金光明最勝王經、妙法蓮華經各十部、朕又別擬寫金字金光明最勝王經、每塔各令置一部、所冀聖法之盛、與天地而永流、擁護之恩、被幽明而恒滿、其造塔之寺、兼爲國花、必擇好處、實可長久、近人不欲、煩晨所及、遠人則不欲、勞衆歸集、國司等各宜務在嚴飾、兼盡潔清、近感諸天、旌幾臨護、布告遐邇、令知朕意、又每國僧寺、施封五十戶、水田十町、尼寺水田十町、僧寺必令有二十僧、其寺名爲金光明四天王護國之寺、尼寺一十尼、其寺名爲法華滅罪之寺、兩寺相共宜受教戒、若有闕者、即須補滿、其僧尼、每月八日、必應轉讀最勝王經、每至月半、師戒羯磨、每月六齋日、公私不得漁獵殺生、國司等宜恒加檢校、

〔大日本史〕三百四　射水郡、○中略古有國府和名鈔、及國分寺、延喜式、○在府村、

〔參考〕

〔編年集成〕吏徵所載　國分寺名爲金光明四天護國僧寺、

〔附錄〕

〔日石寺記錄〕由來御覽付申上卓　卒二年六月十三日

當山開闢者、聖武天皇御宇、神龜二年御建立、

當年迄九百五十六年に相成申候、

石像之不動、長一丈八尺脇立四體、

右行基菩薩之御作、

十二月丁丑朔

十日、丙戌、能登國を、越中國に併す、

〔續日本紀〕十四　十二月丙戌、○十日　能登國併越中國、

○養老二年五月、越前の羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡を割きて始めて能登國を置きしことは、續日本紀に見え、又能登國の越中國と分れしことは、天平寶字

元年五月に在り、

天平十五年癸未　紀元千百三年四

十月　朔丙寅

十七日、壬午、東海、東山、北陸三道二十五國の調庸は紫香樂の宮に貢せしむ、

〔續日本紀〕十五　十月壬午、七〇十日東海東山北陸三道二十五國調庸等物皆令貢於紫香樂宮

天平十六年甲申　紀元千百六年四

九月　朔庚申

十五日、甲戌、巡察使を畿内七道に遣はす、石川東人は北陸道使となる、

〔續日本紀〕十五　九月甲戌、五〇十日遣巡察使於畿内七道〇略中從五位下石川朝臣東人爲北陸道使、〇略中道別判官、一人主典一人、

乙酉、六〇二十日敕八道巡察使等曰、是行使等撿問事條國郡官司依實報答者、縱當死罪、咸原而勿論、若有經間不臣、被使勘權者、事雖細小、依法不容、使宜懇懇告示、一事以上准勅施行、

丙戌、七〇二十日敕頒三十二條於巡察使、事具別敕、因敕曰、凡頃聞諸國郡官人等、不行

法令、空置卷中、無畏憲章、擅求利潤、公民歲弊、私門日增、朕之股肱豈合如此、自今以後、宜依頒條、每四考終、必加訪察、奏聞、即隨善惡黜陟其人、遂令涇渭殊流、賢愚得所、若有巡察使諂曲爲心、昇降失理、當眞法律、以明勸沮、無偏無黨、清風肅俗、拔自常班、處以榮秩、宜告所司、知朕意焉、又口勅十三條具在別勅、又勅曰、爲撿天下諸國政績不今差巡察使分道發遣、但比年以來、所任使人、訪察不精、黜陟有濫、吏民由是未肅風化、所以尙權、故今具定事條、仰令巡撿、唯恐官人不練明科、多犯罪憲、還陷法網、仍垂非常之恩、特開自訴之路、其國郡官司雖犯謀反大逆、常赦所不免、咸悉除免一切勿論、但情懷姧僞、不肯吐實、使人存意、再三喻示、若是因執猶不首伏者、依法科罪、皆天率土宜知朕懷焉、又口勅五條、語具別記、

天平十八年丙戌　紀元千百六年四

四月　朔壬午

五日、丙戌、七道の鎭撫使を置く、中納言巨勢奈氏麻呂は兼北陸・山陰兩道の鎭撫使となり、尋て鎭撫使を停む、

〔續日本紀〕十六　四月丙戌、日〇五中納言從三位巨勢朝臣奈氏麻呂爲兼北陸山陰兩道鎭撫使、

十二月丁巳、○十日停七道鎮撫使、

〔公卿補任〕　中納言從三位巨勢朝臣奈氐麿七十七　左大弁、四月兼北陸道山陰道鎮撫使、○天平十八年の條

六月　壬午朔

二十一日、壬寅、大伴家持越中守に任す、

〔續日本紀〕　十六　壬寅、○二十一日　從五位下大伴宿禰家持爲越中守、

〔公卿補任〕　大伴宿禰家持　天平元年己巳生、十七年正月從五下、十八年宮內少輔、六月民部大(少)輔、越中守、○寶龜十一年の條なり前後略す。

○全文は天平勝寶三年六月少納言に遷任する條に收む、

〔萬葉集古義〕　十七上地　大伴宿禰家持以天平十八年閏七月、被任越中國守即取七月赴任所於時姑大伴坂上郎女贈家持歌二首

閏七月いかゞ、傳寫の誤あるにや、夏六月に改むべし、紀を考るに、六月壬寅大伴ノ宿禰家持爲越中守と見えて、又九月に閏なし、次の文に、取七月とあれば、六月ならでは、次もかなひがたし、○越中國守、民部式に越中ノ國上、職員令に、上國守一人介一人掾一人目一人史生三人、◎本註下略

久佐麻久良、多妣由久吉美乎、佐伎久安禮等、伊波比倍須惠都、安我登許能幣爾、○註略す、

伊麻能其等、古非之久伎美我、於毛保要婆、伊可爾加母世牟、須流須遊乃奈左、○註略す、

八月七日夜、集于守大伴宿禰家持館宴歌、○此に倣ふ、下

秋田乃穂牟伎見我底利、和我勢古我布佐多乎里家流、乎美奈敝之香物

右一首、守大伴宿禰家持作、

乎美奈敝之左伎多流野邊乎、由伎米具利、吉美乎念出、多母登保里伎奴、○此下二首略す

右三首、掾大伴宿禰池主作、○此下池主の歌一首略す、

日晩之乃、奈吉奴流登吉波、乎美奈弊之、佐伎多流野邊乎、遊吉追都見倍之、○註略す、

右一首、大目秦忌寸八千島、

○家持正税使を以て京師に赴かんとすること、春の出擧に依り諸郡を巡行することは、左に連收す、

〔萬葉集古義〕　下十七天　大目秦忌寸八千島之館、餞守大伴宿禰家持宴歌二首、

奈吳能宇美能意吉都之良奈美、志苦思苦爾、於毛保要武可母、多知和可禮奈波

和我勢故波、多麻爾母我毛奈、手爾麻伎底、見都追、由可牟乎、於吉底伊加婆乎思、

右守大伴宿禰家持、以正税帳須入京師、仍作此詞、聊陳相別之歎、四月二十日　四月二

十六日、掾大伴宿禰池主之館餞税帳使守大伴宿禰家持宴詞并古歌四首、○本註及

和我勢古我久爾麻乃之奈婆保等登藝須、奈可牟佐都奇波佐夫之家牟可母、（歌は略す、家持の）

右一首、介内藏忌寸繩麿作之、（繩麿は傳未詳なりす、）

〔萬葉集古義〕（十八上地）同月（天平元年五月）○感寶九日、諸僚會少目秦伊美吉石竹之館飲宴、於時主人造百合花縵三枚、盛豆器、奉贈賓客、各賦此縵作歌三首、

少目は、越中の國の少目なり、石竹は、このほと八位にて、越中の少目なりけむなり、次々に歷のぼりて、この感寶元年よりは、十六年なる經て、外從五位下授むれる伊波大夫、授外從五位下寶龜五年三月甲辰、爲飛騨守、七年三月癸巳、外從五位下奏忌寸石竹爲播磨介、賜伊美吉姓、見ゆ、さて寶字三年十月辛丑、右大史正六位上奏忌寸老等、一千二百餘烟、天下諸姓著君字者、換以公字、伊美吉とかきしなり、○以下の美吉以忌寸と見えて、猶この感寶の頃は伊美吉とかきし者、換以公字、○以下の本註及ひ家持内藏繩麿の歌は略す、

〔萬葉集古義〕（十七下地）礪波郡雄神河邊作歌一首、○註略す、

乎加未河泊、久禮奈爲爾保布、乎等賣良之、苹附之水松類等流登、湍爾多多須良之、

婦負郡渡鵠坂河邊時作歌一首、○註略す、

宇佐可可河泊、和多流瀨、於保美、許乃安我馬、乃安我枳、乃美豆爾、伎奴禮爾家里、○本及ひ見港鵠人作歌一首略す、

新河郡渡延槻河時作歌一首○註略す、

多知夜麻乃、由吉之久良之毛、波比都奇能、可波能和多理瀨、安夫美都加須毛、○註略す、

赴參氣多大神宮行海邊之時作歌一首

氣多、舊本には氣比と作り、今は契沖、多に改めたるに從つ、契沖云、是は能登の國羽咋郡にまします御神なり、聖武天皇の紀に、天平十三年十二月、能登國并越中國、これによりて、越中守なれども、能登をも兼て治めらるる故に、參でらるゝなり、○以下本註及び作歌略す、

能登郡從香島津發船射熊來村往時、作歌二首○作歌及ひ註略す、以下此に倣ふ

鳳至郡渡饒石河之時作歌一首

從珠洲郡發船、還太沼郡之時泊長濱灣仰見月光作歌一首

右、件謌詞者、依春出擧巡行諸郡當時所屬目作之、大伴宿禰家持

〔萬葉集古義〕（十九中地）右件八首歌○八首の歌は略す、者、傳誦之人、越中大目高安倉人種麻呂是也、但年月次者、隨聞之時、載於此焉、

○天平勝寶三年六月十七日、少納言に遷任する條參照すへし、

〔參考〕

〔大日本史〕三百八十四　國郡司、越中欄、

掾大伴池主天平十八年八月見

大目秦八千島天平二十年四月見
大目高安種麻呂天平中見
介内藏繩麻呂天平勝寶元年五月見
少目秦石竹天平勝寶元年五月見

〔三州志〕二來因概覽　十八年丙戌、從五位下大伴宿禰家持家持ハ大納言贈二位安麻呂ノ孫、大納言從二位旅人ノ男也、其傳ハ「萬葉集」卷第三跋ニ云、天平七年正月、叙從五位下、夫ヨリ累進、延暦二年七月十三日任中納言、三年二月兼持節征東將軍、四年八月薨トアリ、越人ノ口碑ニ射水郡布勢ノ丸山、ニ古墟アリ、維昔家持此ニ住セシヨシ、水影明神ノ小祠ハ即チ家持ヲ祭ルト云、又射水ニ古國府ノ遺跡アリ、併セ察スヘシ、俗説ニ礪波郡福光村領ニ館迹アリ、昔家持國司タル時其子左近太夫持豐此所ニ住シ、其子右京亮持定モ此所ニ住ス、今存スル福光八幡社ハ延立ト云コト妄説ナレハ取ルニ足サレトモ、八幡社記等ニ載ルユヘ姑ク此ニ附贅ス、越中守トナル、按ルニ「萬葉集」卷十七ニ大伴宿禰家持以天平十八年閏七月被任越中國守、即取七月赴任所、於時姑大伴坂上郎女贈家持歌ト題シテ二首アリ仕官ノ月「續日本紀」ニハ六月トス、「萬葉」ニハ閏七月トスルノ小異アリ、「續紀」ニハ九月ニ閏アリテ七月ニ閏ナシ又同集ニ卷十九便附大帳使取八月五日天平勝寶三年ナリ應入京師、因此以四日設國厨之膳於介内藏伊美吉繩麻呂館餞之、于時大伴宿禰家持作歌一首、之奈謝可流越爾五箇年住々而立別麻久惜初夜可毛、トアリ、又家持庭中花ノ歌ニ卷十八美由佉布流古之爾久太利來安良多末能等之能五年之吉多倍乃手枕末可受比毛等可須トモ見エタリ、此等ノ歌詞ヲ以テミルトキハ、家持越中ニ在任五箇年ナレトモ、天平十八年閏七月ニ越中ニ下リ、天平勝寶三年辛卯七月ニ歸洛マテヲ屈指スレハ、在任六載ニ渉ル也、況ヤ此年四十六代孝謙帝天平勝寶三年也以七月十七日遷任少納言、仍作悲別之歌贈貽朝集使掾久米朝臣廣繩之館二首ノ前書ニ既滿六載之期、忽値遷替之運、於是別舊之悽、心中欝結、拭渧之袖、何以能早、因作悲歌二首、式遺莫忘之志云云此二首ハ、荒玉乃年緒長久相見氏之彼心引將忘也毛、伊波世野爾秋芽子之努藝馬並始鷹獵太爾不爲哉將別然レハ在任六載ト思ハルレトモ、今千載ノ下ニ在テ臆斷スヘキニ非ス、「續日本紀」孝謙帝ノ寶字二年勅ニ國司交替四年ナリシヲ六載ヲ以テ限トセラルトアリ、但シ是ハ天平勝寶三年ナレハ、寶字二年ヨリハ八年前ニテ未タ交替四年ノ時ナリ、然ルニ越爾五箇年ト詠シ、又既滿六載之期ト云ヘル者、其故考フヘカラス、又「萬葉」ニ十六卷、十七卷、十八卷、十九卷、家持國守タルノ時、領内ノ諸郡巡行家持天平二十年依春出擧巡行諸郡、其郡礪波・婦負・新川・能登・鳳至・珠洲也遊覽ノ歌賦數十首ヲ載ス、其經過ノ地名ハ、越海・射水河・新河・礪波山・礪波關・奈吳海・布勢湖・有磯渡・多枯浦・立山・宵山・鸕坂河・賣比河・延槻河・垂姬浦・英遠浦・叔羅河・卯花山・宇奈比川・澁波里・大野路・乎布崎・伊頭敝山・伊波世野・臼美江・古江・松田江・澁谷・二上山・須蘇末山・三島野・片貝川・信濃濱・雄神河・長濱・珠洲海・能登島・山香島・熊來・羽咋海・饒石川・氣比大神宮・机島等也是等ノ地名每歌詠出ス、京周別ニ「越中萬葉、略解、葉越枝折」ト云、三卷ノ書サ既ニ著ハシ、其編中ニ古歌及ヒ其地名古今ノ異同地方等具サニ標出

持シテ辨定ニモ能登ノ國アリキト思ヘリ、是深ク國史ヲ考ヘザルニ存スルユヘ、世人家時代ニ此諸勝地ノ名珠洲海以下ノ分、今能州ニ存スルモ能登ノ國アリキト思ヘリ、是深ク國史ヲ考ヘザルニ存スルユヘ、世人家

三年ヨリ能登ヲ越中ニ并セ、天平寶字元年再ヒ越中ヲ割テ、今ノ羽咋・能登・鳳至・珠日本紀ニ明文アレハ、家持國守タルトキハ、越中ノ郡ニテ、今ノ羽咋・能登・鳳至・珠洲ノ四郡ハ越中ノ郡名トナル、明ナルコト也、サレハ此珠洲海以下ノ地名考ナル除出セルハ、多クハ家持天平二十年領内巡行ノ時ノ歌也、然ルニ後人之ヲ考ヘス、羽咋海等ノ和歌「萬葉」ニアル心得、能登名勝等ノ地」等ニ其越ニ書載スルハ、家持越中守タルトキ能登國遊覽ノ和歌ト歌三首ノ標題ノ者一所アリ、是ハ家持ノ來ル也、但シ「萬葉」十六卷ニ能登國名ナ用ユルカ、又ハ後人ノ副墨ナル歟

〔三州志〕一故墟考　古國府

二上庄ニ在リ、古國府ト書スハ地名也、古府ト書スハ邑名也、舊注ニ平城也、本丸口五十間、口口八十二間、二丸七十三間、城口百口間、今ノ勝興寺ノ地也、湟盤猶存ス、左右ハ谷、背後ハ山ニ接ス、前頭ハ稍下ルコト四五町ニシテ古府村ニ到ル城跡ハ山下ノ窪也、宮山ヨリ乾方五里云云

九年炎田王モ從五位上ニテ越中ノ守タリ、「拾芥抄」「職原抄」等ノ越中上國ノ脫ニナルユヘ、家持モ天平勝寶元年六月朔、從五位上ナルコト系圖ニミヘ、又天平十泥ラムヘス、其介ハ大國ノ介ハ相當正六位上ニテ見ヘ、內藏伊美吉縄麻呂麻呂ニ作ル、縄掾ハ大國ニ大少掾アリ、大ハ正七位下ニ少ハ從七位上ニ相當也、久米朝臣廣縄大目ニ、少ハ從八位下ニ相當ス、此上目亦大少アリ、大ハ從八位上ニ目アル者大國ノ體也、高安倉人種麻呂元參忌寸八千島アリ、元歷本千十二作ル、少目ハ秦伊美吉石竹、史生ハ土師宿祢道長、射水郡大領ハ安努廣島按ルニ安努ハ「和名抄」射水ノ管郷ニ云、阿努ナルヘシ、今モ此郡ニ阿努郷アリ、阿セルユヘ留ク云ナルヘシ、礪波郡主帳ハ多治比部、羽咋郡主帳ハ能登臣乙美臣ト安ト音通ス、廣島此郷ニ在リ、古國府ト書スハ地名也、古府ト書スハ

作ルニ巨ニ巨也、是等ノ詠皆「萬葉集」ニ載セテ數首アリ、蓋シ家持越中國守ト成テ下リシ天平十八年丙戌ハ、寛政十年戊午ヨリ凡ソ一千零五十六年前也、萬葉ノ其歌中ニ其地名ヲ載テ、顯然トシテ今日ニ存スル者誠ニ皆傳ノ靈妙ナリ、

按ルニ天平十八年大伴宿禰家持越中國司ニ任セラレ、ソノ在住ノ府タルヲ以テ國府ノ號アルコト疑ヲ容レス、其委曲ハ「越中來因卷」及ヒ「楢葉越枝折」ニ詳記ス、此後モ國府タリト見ヘテ「盛衰記」ニ木曾義仲六勝寺今六波寺ノ國府ニ抵ルトアリ、「義經記」ニ文治三年ニ如意城如意渡ト云コトアリ、其支脈ナ考ルニ如意城ハ此國府城、如意渡ハ六勝寺渡也、卽此時守護ナ鎌倉ヨリ此城ニ來ルコトモ見ヘタリ、如意ノ名俱ニ今之ナ聞カス、今守護町村ノ名存スル者ハ卽チ其頃ノ名ナルヘシ、又貞治元年康安二年改元越中國人守護斯波高經ノ代官鹿草出羽ニ背傳ノ靈妙ナリシムト云コト「太平記評判」ニ記セリ、今猶府中村アリ考フヘシ、又永正ノ初メ上杉房能國府タルコト明了也、天正ノ初ヨリハ神保氏春據リシニヤ、天正六年氏春此城ニ在コト「本記」ト併見スヘシ、十二年ヨリハ茲ニ勝興寺ヲ建ツルコト同寺記ニ見ユ、「勝興寺系譜」ニ天正十二年春木舟ノ石黑左近勝興寺顯榮・顯幸ノ上京ノ射水郡古國府城ヲ成政ヨリ寄附アリ、故ニ此地ニ勝興寺ヲ建、同年城戸刑部・本波主計・沼田庄左衛門等討死シ、防戰ノ衛盡キ此事ヲ與力坊主ヨリ左右ノ冬移ル下云「瑞泉寺記」ニハ天正九年成政ノ爲ニ古國府勝興寺破却セラル、然ルニ十三年秀吉公下向ノ時、六道寺ニ於テ面接、古國府ニテ所領ヲ賜ルト、二說矛盾ス參稽スヘシ、

〔三州志〕 雜錄餘考二 六勳寺ノ國府、射水那ニ在リ、六勳寺ハ一ニ六道寺ニ作ル、日本史ニ無勳寺ニ作ルハ非也、今六勳寺ニ作ル、「拾芥抄」ニモ越中國府射水郡トアリ、今ハ之ヲ古國府ト云、卽今古府村ト云モアリ、此村並ニ國分村アレハ是モ古ノ國分寺跡ニテ、此地越中ノ國府ナルヘシ、今ノ勝興寺ノ地モト城跡ト云傳フ、然レハ義仲ノ營スルモ此城地ナルヘ、事疑フヘカラス、其地海濱也、在昔大伴家持、越中守タルトキモ是其國府ナルヘシ、

天平十九年丁亥 紀元千四百七年

九月 甲戌朔

二日、乙亥、先位礪波志留志、米三千碩を盧舍那佛の智識に奉せしを以て、外從五位下を授く、

〔續日本紀〕 十七 九月乙亥、○二 河內國入、大初位下阿保連人麿、錢一千貫、越中國人無位礪波臣志留志米三千碩、奉盧舍那佛智識、並授外從五位下、

○志留志の員外介に任せらること、神護景雲元年二月二十日條に在り、

十一月 癸酉朔

四日、丙子、茨田王、越中守に任ず、

〔續日本紀〕 十七 十一月丙子、○四 從五位上茨田王、爲越中守、

〔參考〕

〔大日本史〕 二百十三 國郡司、越中守欄 茨田王、天平十九年十一月任、○一作越前守、

天平勝寶元年己丑 紀元千四百九年

閏五月 甲午朔

二十七日、庚申、越中國掾大伴池主、越前國掾に遷り、久米廣縄之れに代り、尋て朝集使に附きて京に入り、是に至りて、歸任せり、

〔萬葉集古義〕 十七上地 相歡歌二首 ◎註略す

庭爾敢流雪波知敝之久、思加乃未爾於母比底伎美乎、安我麻多奈久久爾、◎註略す

白浪乃、余須流伊蘇未乎、榜船乃、可治登流間奈久、於母保要之伎美、◎註略す

右以天平十八年八月、掾大伴宿禰池主附大帳使、赴向京師、而同年十一月、還到本任、仍設詩酒之宴、彈琴飲樂是日也、白雪忽降、積地尺餘、此時也、復漁夫之船、入海浮淵、爰守大伴宿禰家持寄情二眺聊裁所心、

大帳使は、調庸正稅の損益等を記せる大帳を諸國より京師に持て上る使なり、委くは民部式に處々に見ゆ、◎以下の本註略す、

〔萬葉集古義〕 十八上天 越前國掾大伴宿禰池主來贈歌三首

以今月十四日、到來深見村、望拜彼北方、常念芳德、何日能休、兼以隣近、忽增戀緒、加

以先書云、暮春可惜、促膝未期、生別悲兮、夫復何言、臨紙悽斷、奉狀不備、◎此の下三首の歌を載せず、今略す、

深見村は加賀郡に在り、兵部式に、加賀郡の驛馬五疋とあり、此下三十六丁同人の書簡に、今月十五日、到來部下加賀郡境、而陸見射水之郷、繼緒深海之村云々と見ゆ、深見は、やがて深見なり、○部下になり、弘仁十四年に越前の國を割て、加賀國を置れたれば、其以往は、越前の部下なり、○部拜彼北方は越中府は越前の北方に當れば なり、

〔萬葉集古義〕下十八　下地　國掾久米朝臣廣縄、◎本書十八卷上の題の下に注して云く、掾久米朝臣廣縄は傳未詳なれども、越前國の掾大伴の宿禰池主なりしなるべし、池主は越中國掾なりしなる、次下に天平二十年とあり、越前に移されたるなるべし、その代りに、廣縄の任られたるなるべしとあり、以天平二十年附朝集使入京、其事畢而、天平感寶元年閏五月二十七日、還到本任、仍長官之館、設詩酒宴樂、飲於時主人守大伴宿禰家持作歌一首並短歌、◎註略す

於保伎見能、末伎能末爾末爾等里毛知底、都可布流久爾能、年内能、許登可多禰母知多末保許能、美知爾伊天多知、伊波禰布美、也末古衣野由伎、彌夜故敝爾末爲之和我世乎、安良多末乃等之由吉我敝理、月可佐禰美、奴日佐末禰美、故敝流曾良、夜須久之安良禰波、保止止支須、支奈久五月能、安夜女具佐、余母疑可豆良伎左加美都伎、安蘇比奈具禮止、射水河雪消溢而逝、水能、伊夜末思爾乃未、多豆我奈久、奈呉江能須氣能、根毛己呂爾、於母比牟須保禮奈介伎都都、安我末川君我、許登乎波里、可敝利末可利天、夏野能佐由利能波奈能、花咲爾爾布夫爾惠美天、阿波之多流、今日乎波、自米氐鋭奈須、可久之都禰見牟、於毛我波利世須、◎註略す反歌二首の註も之に倣ふ

反歌二首

許序能秋、安比見之末爾末、今日見波、於毛夜目都良之、美夜古可多比等、可久之天母、安比見流毛能乎、須久奈久母、年月經禮婆、古非之家禮夜母、

〔萬葉集古義〕十九　中地　正税張使拯久米朝臣廣縄、事畢退任、適遇於越前掾大伴宿禰池主之館、仍共飲樂也、于時久米朝臣廣縄、囑二芽子花作歌一首、

正税帳使云々、上に二月三日の歌の左に、判官久米朝臣廣縄、以正税帳使入京、師云々と見えたり、池主は、家持の卿一族、殊に二三箇年前まで越中の掾にて、二ツなき得意なりければ、其命に宿られけるをりしも廣縄も越中の任に退るに、これも立よりけるゆゑに、適遇て飲樂せられしなり、

君之家爾、殖有芽子之、始花乎、折而挿頭奈、客別度知、◎註略す

大伴宿禰家持和歌一首

立而居而、待登待可禰、伊泥氐來之、君爾於是、相挿頭都流波、疑、◎註略す

●本書十七卷上地に載せたる相歌、及ひ十九卷中地に載せたる廣縄家持の歌は、此の時の事にあらざるも、事相類するを以て此に彙收す、

〔參考〕

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中欄

掾久米廣繩天平二十年三月見、

天平勝寶三年辛卯　紀元千四百十一年

六月壬午朔

十七日、酉、越中守大伴家持少納言に任す、

〔萬葉集古義〕十九中地　以七月十七日遷任少納言、仍作悲別之歌贈貽朝集使、掾久米朝臣廣繩之館二首◎註略す、

既滿六載之期、忽値遷替之運、於是別舊之悽、心中鬱結、拭涕之袖、何以能旱、因作悲歌二首、式遣莫忘之志、其詞曰、

六載之期、家持ノ卿、天平十八年七月に、越中に下られ、今勝寶三年七月に、少納言にめされて、八月に京に上られけるゆゑに、全くは五年なれども、前後合て六載にわたれるから、かく略くしるせり、◎以下の本註略す、

荒玉乃、年緒長久相見思之、彼心引、將忘也毛、◎註略す、下此に倣ふ、

伊波世野爾秋芽子之奴婁、馬並始應獵太爾、不爲哉將別、

右八月四日贈之

便附大帳使、取八月五日、應入京師、因此以四日、設國廚之饌、於介內藏伊美吉繩麻呂館餞之、于時大伴宿禰家持作歌一首

之奈謝可流、越爾五箇年、住住而、立別麻久、惜初夜可毛、

五日、平旦上道、仍國司次官已下諸僚、皆共視送、於時射水郡大領、安努君廣島、門前之林中、預設餞饌之宴、于時大帳使、大伴宿禰家持、和內藏伊美吉繩麻捧盞之歌、一首、

玉桙之道、爾出立、往吾者、公之事、跡乎、負而之將去、

○天平十八年六月二十一日、家持越中守となる條、參看すべし、

〔參考〕

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中欄

礪波郡主帳多治比部北里天平勝寶二年二月見、

礪波郡少領利波臣足天平勝寶二年六月見、

射水郡大領安努廣島天平勝寶三年八月見、

〔續日本紀〕三十八　延曆四年八月、○中略庚寅、中納言從三位大伴宿禰家持死、祖父大納言贈從二位安麻呂、父大納言從二位旅人、家持天平十七年授從五位下、補宮

内少輔、歷任内外、寶龜初、至從四位下左中辨兼式部員外大輔、十一年拜參議、歷左右大辨、尋授從三位、座永上川繼反事、免移京外、有詔宥罪、復參議春宮大夫、以本官出爲陸奥按察使、居無幾、拜中納言、春宮大夫如故、死後二十餘日、其屍未葬、大伴繼人、竹良等殺種繼、事發覺、下獄、案驗之、事連家持等、由是追除名、其息永主等並處流焉、

〔公卿補任〕　參議正四位下大伴宿禰家持、五十二、大納言從二位旅人(又名多比等)之子、天平元年己巳生、十七年正月從五下、十八年三月宮内少輔、六月民部大輔、越中守、廿一年四月從五下、勝寶二年四月兵部少輔、九年六月爲大輔、寶字二年六月因幡守、八年正月薩摩守、神護景雲元年八月太宰少貳、四年十月六日民部大輔、寶龜元年九月左中辨、兼中務大輔、十月正五位下、二年十一月從四位下(辨官補任正五位上者、)三年二月兼式部大輔、五年三月相模守、止辨、九月兼左京大夫、並上總守、六年十一月衛門督、七年三月兼伊勢守、八年正月七日從四位上、九年正月十四日正四位下、十年二月一日任參議、九日兼右大辨右京大夫、十〇以上寶龜年の條、寶龜十二年右大辨、四月十四日兼任春宮大夫、十五日正四位上、五月四日兼左大辨、八月一日復任左大辨參議、十一月十三日從三位、頭書云、或本云、天應元年正月正四位上、十一月十三日從三位、二年正月座事除官位、延曆二年正月十日免罪、更任參木、春宮大夫、左大辨、辨官補任云、天應元年閏正月座事者、又云、天應二年正月座事除官位、又云、寶龜元年十一月甲午任左大辨、參木、宮内卿、越前守如元、兼中宮大夫、停左大辨、延曆九二十八薨、〇以上寶龜十二年の條、左大辨春宮大夫陸奥守、天應二年閏正月座永上川繼事免移京外南、四月日詔宥罪、後更任參議、兼官如元、五月五日更任春宮大夫、六月兼陸奥出羽按察使、〇以上天應二年の條、

延曆二年七月十三日任從三位、兼陸奥按察使、元參議春宮大夫如元、〇以上延曆二年の條、

三年二月爲持節征夷將軍、春宮大夫、〇以上延曆三年の條、

四年八月庚寅日薨、廿餘日其骸未葬、大伴繼人竹良等射煞中納言藤種繼、事發覺、下獄案驗之、事連家持、由是追除名、其息永主等並處流、(參木三年、中納言二年、)中納言從三位兼行春宮大夫陸奥按察使鎮守府將軍在陸奥、頭書云、日本後紀云、延曆廿五年三月辛巳、勅緣延曆四年事配流之輩、先已放遷、今有所思、不論存亡、宜叙本位、復大伴宿禰家持從三位者、可尋之、〇以上延曆四年の條、

〔大日本史〕　百二十一〇上略　家持善和歌、撰萬葉集二十卷、上自雄略、下迄廢帝朝、

所收凡四千餘首、蒐羅該博、足以觀民風、先是篇詠未有成書、後世言和歌者、取爲模範焉、萬葉集撰人、諸說紛紜、無所適從、今考本集、且據拾芥抄所載藤原定家說、定爲家持所撰、

〔萬葉集人物傳〕三宿禰　大伴宿禰家持　此人の作歌、卷々に往々出さる中、八卷四十丁秋雜歌に、大伴家持秋歌四首云々とありて、左に註して右四首天平八年丙子秋九月作と見えさる、これ當集に此人の歌作る年序を記しさる事の見えさるむじめなり、此ほとゝ若年にして、未官に任れさりしなるべし、かくて五年を歷て、十七丁十一に、天平十三年四月三日の歌三首ありて、右內舍人大伴宿禰家持從久邇京報送弟書持と記し、又此卷七五十に、天平十六年甲申春二月、安積皇子薨之時、內舍人大伴宿禰家持作歌六首と見えされば、其ほとゝ內舍人にめされてありしなり、內舍人は、續紀に、文武天皇大寶元年六月、始補內舍人九十人、於太政官列見云々とある、これ內舍人を補れしはじめなり、職員令に、內舍人九十人、掌帶刀宿衛供奉雜使、若駕行分衛前後、とあり、さて三代實錄、貞觀十年正月十八日の處に、諸內舍人皆是豪家、年少云々と見え、軍防令に凡五位以上子孫、年廿一以上、見無役任者、每年京國官司勘檢、知實限、十二月一日、並身送式部、申太政官、檢簡性識聰敏儀容可取、充內舍人、三位以上子、不在簡限、以外式部隨狀充、大舍人及

東宮舍人、とあるに、そのほとゝ年も廿一歲以上にて、且形容も端正しゐ、〜やとも知れぬ、まさに集中に娘子等に念れて贈答へたる歌往々見えさるに、その美貌を賞愛まれしこともにもひやられさり、さて同じ十七年五月に、五位を授れる、それ迄ゝ六位にて、內舍人なりしと見えさり、かくて始終の履歷ゝ、續紀に、天平十七年正月乙丑、正六位上大伴宿禰家持授從五位下、十八年三月壬戌、爲宮內少輔、六月壬寅、爲越中守、天平勝寶元年四月甲子朔、授從五位上、此集十七丁に、勝寶三年七月十七日、遷任少納言、とあり、紀文には漏たり、六年、四月庚午、爲兵部少輔、十一月辛酉朔、爲山陰道巡察使、天平寶字元年六月壬辰、爲兵部大輔、此集廿卷五十七丁に、天平寶字元年十二月の歌あり、て左に右中辨宿禰家持作、但依大藏政不堪奏之也、とあり、其次五十八丁に、同二年正月の歌あり、て、右中辨大伴宿禰家持、とあり、大藏政は右中辨の職なり、このほと右中辨になられてありし、紀文には漏たるなり、二年六月丙辰、爲因幡守、六年正月戊子、爲信部中務大輔、八年正月己未、爲薩摩守、神護景雲元年八月丙午、爲太宰少貳、寶龜元年六月丁未、爲民部少輔、九月乙亥、爲左中辨兼中務大輔、十月己丑朔、授正五位下、二年十一月丁未、授從四位下、三年二月丁卯、右中辨從四位下大伴宿禰家持爲兼式部員外大輔、五年三月甲辰、爲相模守、九月庚子、爲左京大夫、同日、爲兼上總守、六年十一月丁巳、爲衛門督、七年三月癸巳、爲伊勢守、八年正月庚申、授從四位上、九月丙寅、內大臣從

二位藤原朝臣良繼薨云々與云々大伴宿禰家持等同謀欲害大師於是云々以告大師皆捕其身下吏驗之對曰良繼獨爲其首他人曾不預知於是强勅大不敬除姓奪位居二歲仲滿謀反云々九年正月癸亥授正四位下十二年二月丙申朔伊勢守正四位下大伴宿禰家持爲參議甲辰爲右大辨天應元年四月壬寅右京大夫右大辨如譌れるか正四位下大伴宿禰家持兼陸奥爲春宮大夫癸卯授正四位上五月乙丑爲左大辨春宮大夫如故八月甲午正四位上大伴宿禰家持爲左大辨兼春宮大夫先是連母憂解任至是復焉十一月己巳授從三位延曆元年閏正月壬寅左大辨從三位大伴宿禰家持云々等五人職事者解其見任散位者移京外並坐川繼事也水上眞人川繼なり川繼は鹽燒王の子なり五月己亥參議從三位大伴家持爲春宮大夫六月戊辰爲兼陸奥按察使鎮守將軍二年七月甲午爲中納言春宮大夫如故三年二月己丑爲持節征東將軍四年八月庚寅中納言從三位大伴宿禰家持死死字類聚國史並舊本三卷末頗歷には薨と作り氏頗歷には後名を除かれたるにより紀には死と作るなるべし云々死後除日其屍未葬大竹繼人竹良等殺種繼事發覺下獄案驗之事連家持等由是追除名其息永主等並處流焉とあり考るに文粹二卷三善清行意見請加給大學生徒食料事とある處に給罪人伴家持越前國加賀郡沒官田一百餘丁云々以充生徒食料號曰勸學田云々これふてもの罪をかゝふられしことゝ侯者の讒ふ出しこと知れさりかくて類聚國史三十四ふ延曆二十五年三月辛巳勅緣延曆四年事配流之輩先已放還今有所思不論存亡宜敍本位復大伴宿禰家持從三位大伴宿禰永主從五位下云々と見えさり、さて此集廿卷末に天平寶字三年春正月一日因幡國廳にて國郡司等を饗賜へる宴時に家持卿の作る歌を載て卷を終られさり、かくてその年より延曆四年八月彼卿の薨られさるまで、凡廿六年の久しき間に、彼卿の作れし歌もなほ多くありけむを、此集ふ續て編集し人もなかりしふ依て、失て世ふ傳さらぎなりにけむ、まことふうらめ〳〵くを〳〵むべき事ふそ有ける、これを思ひてもいよ〳〵此集の又なく貴くめでさく、彼主の勞功のいみ〳〵きほとをも思ふべし、もし此集世ふ微ひなせむ、何ふよりてか上古の手ぶりをむうかゝふもかくふも仰ぎ慕ふべきゝ、彼主の神靈ふなむ、

天平勝寶六年甲午　紀元千四百十四年

五月丙申朔

十四日、配石川豐人、越中守に任す、

〈續日本紀〉十九　五月己酉、○十四日從五位下石川朝臣豊人爲越中守、

十一月辛酉朔

一日、辛酉諸道の巡察使を任す、藤原武良志は北陸道使となる、

〈續日本紀〉十九　十一月辛酉朔、任巡察使、以從四位上池田王爲畿内使、○略中從五位下藤原朝臣武良志爲北陸道使、從五位上大伴宿禰家持爲山陰道使、○略中道別錄事一人、

天平寶字元年丁酉　紀元千四百十七年

五月戊申朔

八日、乙卯越中國を分ちて復能登を置く、

〈續日本紀〉二十　乙卯、○日八勅曰、頃者、上下諸使、惣附驛家、於理不穩、亦苦驛子、自今已後、宜爲依令、其能登、安房、和泉等國依舊分立、

〈大日本史〉三百四　越中國、○略中天平寶字元年、復置能登、於是管四郡、續日本紀○能登を越中に并せしことは、天平十三年十二月條に見ゆ、

淳仁天皇

天平寶字二年甲戌　紀元千四百十八年

正月甲戌朔

五日、戊寅紀廣純を北陸道に遣はして、民の疾苦を巡問せしむ、

〈續日本紀〉二十　二年春正月戊寅、○五詔曰、朕聞、則天施化、聖主遊章、順月宜風、先王嘉令、故能二儀無愆、四時和協、休氣布於率土、仁壽致於郡生、今者三陽既建、万物初蘇、和景惟新、人宜納慶、是以別使八道、巡問民苦、務恤貧病、矜救飢寒、所冀撫字之道、將神合仁、亭育之慈、長天通事、疾疫咸却、年穀必成、家無寒窶之憂、國有來蘇之樂、所司宜知差清平使、勉加賑恤、稱朕意焉、以從五位下石川朝臣豊成爲京畿内使、錄事一人、○略中正六位上紀朝臣廣純爲北陸道使、○略中道別錄事一人、

九月庚午朔

二十八日、丁酉始めて越中等、諸國に驛鈴を頒つ、

〈續日本紀〉二十　丁酉、○二十八日、始頒越前、越中、佐渡、出雲、石見、伊豫等六國、飛驛鈴、國一口、

天平寶字三年己亥　紀元千四百十九年

五月　朔丙寅

九日、甲戌、諸國に常平倉を置きて、還脚の飢苦を救はしめ、北陸道は左平準署をして之を掌らしむ、

〔續日本紀〕二十　五月甲戌、○九十勅曰、頃聞、至于三冬間、市邊多餓人、尋問其由、皆云、諸國調脚不得還鄉、或因病憂苦、或無糧飢寒、朕竊念、茲情深矜愍、宜隨國大小割出公廨以爲常平倉、逐時貴賤、糴取利、普救還脚飢苦、非直霑外國民、兼調京中穀價、其東海、東山、北陸三道、左平準署掌之、○下略

九月　朔甲子

十九日、壬午、新羅を征せんかため北陸道の諸國に課して、兵船八十九艘を造らしむ、

〔續日本紀〕二十　壬午、○十九日造船五百艘、北陸道諸國八十九艘、○中略並逐閑月營造三年之內成功、爲征新羅也、

十一月　朔癸亥

十四日、丙子、東大寺、越中國諸郡庄園總券成る、

〔大日本古文書〕四　正倉院文書

○東大寺越中國諸郡庄園總券

（東南院文書、二）○紙面に「越中國印」二百五アリ

（異筆）「越中國諸郡庄園惣券第一　國判　寶字三年造營牒」

越中國檢定東大寺墾田地柴處

惣地伍伯捌拾柒町柒段壹拾捌歩

開田壹伯伍拾肆町陸段肆拾陸歩

未開肆伯參拾參町參伯參拾貳歩

礪波郡

合伊加流伎野地壹伯町　東山　南利波臣志留志地　西故大原眞人麻呂地　北寺田並未開

射水郡

合貳伯伍拾參町陸段伯陸拾陸歩

開田壹伯拾捌町壹段參伯拾陸歩
未開壹伯參拾伍町肆段貳伯拾歩
楔田村地壹伯參拾町捌段壹伯玖拾貳歩（東西北伯姓口分南礒波射水二郡堺）
開田參拾肆町壹伯玖拾貳歩
未開玖拾陸町捌段

七條楔田上里參町陸段貳伯捌拾歩（田二町九段二百八十歩 野七段）
一行五葦原田七段　六葦原田一町
二行五葦原田七段二百歩　六葦原田四段
三行五葦原田一段八十歩

楔田里壹拾陸町陸段肆拾貳歩（田七町六段卌二歩 野九町）
一行一葦原田一町　二葦原田九段
四葦原田五段　五葦原田一段二百卌歩
二行一葦原田七十二歩　二葦原田四段
三葦原田一段　四葦原田五段
五葦原田六段

三行一神社弁田　四葦原田五段
五葦原田九段　六葦原田二段五十歩
四行二葦原田八段二百歩　口葦原田九段二百歩

櫻田里肆町伍段（田三町五段 野一町）
一行二櫻田捌段　三櫻田七段
二行一櫻田一町　二櫻田一町

八條新大葦原里壹拾伍町貳段陸拾歩（田九段六十歩 野十四町三段）
六行五葦原田三段三百廿歩　六葦原田五段百歩

新葦原南里貳拾壹町貳伯歩（田八町二段二百歩 野十二町八段）
一行二葦原田八段　三葦原田九段
二行一葦原田七段　三葦原田一町
三行三葦原田三段　四葦原田六段
五葦原田二段　六葦原田二段
四行葦原田四段
五行二葦原田二百歩　三葦原田二段

四葦原田三段　五葦原田四段
六行一葦原田三段　三葦原田一町
四葦原田一町
九條上葦原南里貳拾柒町肆段參伯參拾壹田九町四段三百卅壹野十八町
三行三葦原田三段　五葦原田三段
六葦原田七段
三行二葦原田九段三百壹　二葦原田二段百卅壹
三葦原田三段　四葦原田六段二百卅壹
五葦原田九段　六葦原田四段百壹
四行一葦原田六段　二葦原田五段
三葦原田四段　四葦原田四段
五葦原田九段二百壹　六葦原田一段百卅壹
五行四葦原田一町　五葦原田四段
六葦原田二百卅壹
六行四葦原田三段二百壹　五葦原田二段

上葦原里壹拾貳町參段田一町三段野十二町
一行二葦原田五段　三葦原田四段
三行一葦原田一段
六行二葦原田三段
十條東葦原里參拾町野
須加村地參拾伍町壹段貳伯貳拾四壹東大葦原里五行与六行堺畔南西伯姓口分北須加山
開田貳拾捌町伍段參伯壹拾四壹
未開陸町伍段貳伯柒拾壹
七條塞里貳拾町貳拾肆壹田十六町七段百十四壹野三町二段二百七十壹
一行一被田八段　二被田一町
三被田一町　四被田一町
五被田一町　六被田一町
二行一被田五段百壹　二被田六段百六十壹
三被田九段二百八十壹　四被田七段
五被田五段三百壹　六被田九段二百壹

三行二被田八段百出　三被田九段三百出
四被田三段三百十出　五被田五段百出
六被田七拾二出
四行一被田七段　二被田一町
三桒田六段二百八十出　五被田三段二百卌出
六被田七段二百廿出
五行一馬背田三段七十二出
桒田里玖町柒段田七町五段野二町二段
一行一被田一町　二被田一町
三被田七段　四被田九段
二行一被田九段二百出　二被田九段二百出
三被田八段　四被田一段
三行一被田六段
四行二被田三百廿出
八條下莘原里肆町柒段貳伯出田三町六段二百出野一町一段

天平寶字三年東大寺開田越中國射水郡須加野地圖正倉院御物

六行二葦原田九段　三葦原田三段
四葦原田六段　五葦原田一町
六葦原田八段二百出

須加里柴段蚯田

六行一被田五段　二被田二段

鳴戸村地伍拾捌町參段壹拾步東南四北公田

開田參拾參町參伯出

未開貳拾伍町貳段陸拾出

十二條里原里貳拾柴町伍段貳伯壹拾出田十四町八段三百卅出野十二町六段二百卅出

一行一里原田伯姓墾田并野　二里原田一町柴古出女本
三里原田一町　四里原田一町
五里原田一町　六里原田六段
二行一里原田伯姓墾田　二里原田七段
三里原田八段　四里原田九段百八十出
五里原田九段百八十出　六里原田四段

三行一伯姓野地
三豆原田九段百八十歩
五豆原
四行一伯姓口分田
三豆原田七段
五豆原
五行一蒲田四段
五蒲田一段百廿歩
六行二蒲田二段
四蒲田一段百廿歩
六蒲田二段卅歩
澤浴里壹拾柒町壹伯肆拾歩田八町一段百卅歩野八町九段
一行一豆原
三小蒲田三段
五蒲田六段
二豆原田八段
四豆原田三段
六豆原
二豆原田一町
四豆原
二蒲田八段二百卅歩
三蒲田一段
五蒲田七段

二行一豆原
三小蒲田三段
五小蒲田三段
三行豆原
三小蒲田九段
五小蒲田三段二百卅歩
四行一小蒲田二段
四小蒲田五段二百八十歩
六小蒲田五段二百六十歩
十三條大塩上里田壹町貳段壹伯貳拾歩並田
三行三大塩田二段百廿歩
六行六大塩田一町
大塩中里肆町柒段貳拾歩田三町九段二百六十歩野七段百廿歩
五行一二三四並伯姓口分田並墾田
六豆原田一町
二豆原田二段
四小蒲田四段
六小蒲田六段二百卅歩
二豆原
四小蒲田二段
六小蒲田九段百廿歩
三小蒲田二段百九十歩
五小蒲田三段六十歩
五大塩田七段百廿歩

六行一二並伯姓口分田　三大塩田二段
四大塩田七段二百六十歩　五大塩田一町
六見原田二段二百卅歩
大塩下里柒町柒段貳伯肆拾歩田四町八段百八十歩野二町九段六十歩
四行一鳴戸田七段　二鳴戸田五段三百卅歩
三鳴戸田三段　二鳴戸田六段
五行一鳴戸田五段　三鳴戸田七段
三鳴戸田四段二百六十歩
六行二鳴戸田一段
四鳴戸田八段三百歩
鹿田村地貳拾玖町參段壹伯歩東南公田北法花寺溝四石川朝臣豊成地
開田貳拾貳町肆段貳伯貳拾歩
未開陸町捌段貳伯肆拾歩
十五條桃田里陸町田三町四段野二町六段　六小家田一町
一行五小家田一町

二行三小家田七段　五小家田四段
六小行家田三段
桃田下里柒町柒段貳伯肆拾歩田三町五段百卅歩野四町二段百卅歩
一行一小家田三段　二小家田二段
三小家田一町　三小家田一町
二行一小家一田町
十六條小家田里伍町貳段並田
四行六小家田一町　六小家田一町
五行五小家田九段　五小家田一町
六行四小家田三段
六小家田一町
小家田下里壹拾町參段貳伯貳拾歩並田
二行三小家田二段二百廿歩　四小家田三段
三行二小家田三段　三小家田一町
四小家田一町

四行一小家田一町　二小家田七段
三小家田八段　四小家田九段
五行一小家田一町　二小家田七段
三小家田七段　四小家田五段
六行一小家田一町　二小家田二段

新川郡

合弐伯參拾肆町弐伯拾弐歩
開田參拾陸町肆段玖拾歩
未開壹伯玖拾染町陸段伯弐拾弐歩
丈部村捌拾肆町弐伯拾弐歩東古俣里与滔无里堺畔南大田里与箕田里堺畔並高市江四杏田里与北丈部溝井伯姓口分
開田參拾陸町肆段玖拾歩
未開肆拾染町陸段壹伯弐拾弐歩
十六條滔无里弐拾陸町壹段捌拾歩田九町一段九十歩野十六町九段三百五十歩
一行一滔无田五段六十歩　二滔无田三段

三滔无田四段　四滔无田五段
二行二滔无田二段　三滔无田五段
四小嶋田四段　五小嶋田三段二百歩
三行三滔无田二段　四滔无田一段
五小嶋田一段百歩
四行三滔无田二段百八十歩　四滔无田四段
五小嶋田二段三百十歩
五行一滔无田二段三百歩　二滔无田五段
三滔无田八段　四滔无田一段
五小嶋田一段　六小嶋田一段廿歩
六行一滔无田二段　二滔无田五段
三滔无田八段　四滔无田一段
五小嶋田三段　六小嶋田八段
十六條大田里參拾參町伍段伯玖拾弐歩田十七町二段六十歩野十六町三段百廿二歩
一行一泉田四段五十歩　二泉田六段

三泉田二段　四泉田四段七十出

六小嶋田七段

二行一泉田二段　二泉田七段

三泉田八段　四泉田七段

五小嶋田六段

三行一泉田九段　二泉田七段

三泉田一町　四泉田八段

五泉田五段百八十出　六泉田九段二百卅出

四行一泉田二段　二泉田一段

三泉田二段　四泉田九段

五泉田一町　六泉田九段

五行二道田九段二百出　三道田六段

四泉田三段　五泉田三段

六泉田八段

六行一泉田二百卅出　二野田三段百廿出

六泉田三段卅出

十三條幡手里武拾肆町叁段叁伯出　田十町三百出　野十四町三段

一行一幡手田八段六十出　二大田四段

二行一大田八段　二大田三段

六泉田一町

三行一大田六段二百出　二大田四段

三牧野田二百出　四牧野田四段

五牧野田六段

四行二大田四段　三大田五段

四大田六段　五牧野田五段百六十出

五行四牧野田四段二百卅出　五牧野田五段百六十出

六牧野田四段

六行四小島田二百出　五牧野田四段百六十出

六牧野田七段

大藏野地壹伯伍拾町東堀波川、南野、西孫名人山道非百姓家辛女川北故笠朝臣茂万呂地如本員並未開

以前去天平勝寶元年占定野地、豆墾開如件、
天平寶字三年十一月十四日笔師散位正八位下小槁公石㊀
造寺判官外從五位下上毛野公真人　知開田地道僧　美天
佐官法師平來　都維那僧　仙主

国司
從五位上行守　王朝集使　㊀六位下行椽三島縣主宗麻呂
㊀六位上行介粟田朝臣男玉　㊀八位上行目小野朝臣大帳使
從五位上行員外介日下部宿祢在京

〔參考〕

〔大日本史〕三百八十四　國郡司、越中欄
介粟田男玉天平寶字三年十一月見
員外介日下部○名　天平寶字三年十一月見
掾三島宗麻呂天平寶字三年十一月見
目小野○名　天平寶字三年十一月見

〔大日本史〕三百四　射水郡○中略天平寶字中、三島宗麻呂爲本國掾、亦本土人、東大寺文書

〔萬葉集古義〕十八上地　天平感寶元年五月五日、饗東大寺之占墾地使僧平榮等、于時、守大伴宿禰家持送酒僧歌一首、○註略す

夜岐多知乎、刀奈美能勢伎爾、安須欲里波、毛利敝夜里蘇倍、伎美乎等登、米牟、

〔萬葉集古義〕十八下地　緣檢察墾田地事、宿礪波郡主帳多治比部北里之家、于時、忽起風雨、不得辭去、作歌一首、

夜夫奈美能、佐刀爾夜度可里、波流佐米爾、許母理都追牟等、伊母爾都宜都夜、○註略す

二月十八日、守大伴宿禰家持作

〔附錄〕

〔越中志〕礪波郡上　一　礪波關　補　蓮沼村松永村領今石動ヨリ行程三十丁計

萬葉集云、天平感寶元年五月五日、饗東大寺之占墾地使僧平榮等、于時、守大伴宿禰家持送酒僧歌一首、○歌略す

堀河百首　顯季

妹り家ゑ蜘のふるまひ来るからん礪波の關を今日越くれと、

新六帖　衣笠内府

いつくゝより我宿りせん燒太刀の礪波の關ゝ越そ暮ぬる、

夫木集　定嗣

明渡る礪波の關のまさしゝ久いかつ別を行せるとゝへめよ、

名寄

越路ゝいそり引程ゝ成ゝけり礪波の關の雪の曙、

〈三州志〉 [illegible]礪波山トハ、「一代要記」ニ、越中加賀ノ堺礪波山トアリ、即之ヲ「古事記傳」ニモ之ヲ引ケリ、我土ノ舊記ニハ、埴生村ヨリ加賀倶利加羅ノ境ニ至ルヲ云トアリ、古ヘ、此地ニ礪波關アリ、「萬葉集」十九ニ長歌アリ、土人云、今石坂新村ヨリ七町南ニ、安居山觀世音ノ石碑アリ、此處、左右ハ高キ畑ニテ、中通リハ低キ山田ナリ、即チ古ノ關跡トナリ、故ニ今モ此邊ヲ關畑トモ呼ヒ、或ハ關ノ谷内トモ呼ブ、今此地遠沼村ノ農夫ニ關五郎右衛門ト云故家アリ、古ノ關守ノ後ト云、

〈礪波誌〉 下　礪波關址　石坂新村の南七町許にあり三州志に曰く、今安居觀音石碑の在る處、即ち是なり此地に關畑又關野谷内などいへる名の存せるは以て證となすべし、又遠沼の農夫に關五郎右衛門なるものあり、相傳ふ關吏の後なりと、關を設けしは和銅六年なりといふ、古傳に曰く、帝都より北陸道に下るに、先に荒乳山を越ゆ、此土を越前といひ、中に礪波山を越ゆ、此土を越中といひ、後に名立山を越ゆ、此土を越後と名けゝ、之を越の三關と稱ふと、

天平寶字四年庚子　紀元千四百二十年

正月朔癸亥

二十一日、癸未、諸道巡察使を任す、石上奥繼北陸道使となる、

〈續日本紀〉 二十二　癸未○二十一日　以文部少輔從五位下藤原朝臣楓麻呂爲東海道巡察使、○略中河内少掾從六位上石上朝臣奥繼爲北陸道使、○略中毎道錄事一人、觀察民俗便即校田、

天平寶字五年辛丑　紀元千四百二十一年

正月朔丁亥

十六日、壬寅、阿倍朝臣廣人、越中守に任す、

〈續日本紀〉 二十三　壬寅○十六日　從五位下阿倍朝臣廣人爲越中守、

十月朔壬子

一日、壬子、蜜奚野、越中員外介に任す、

〔續日本紀〕二十三　十月壬子朔、外從五位下蜜奚野、爲越中員外介、

十日、辛酉、唐主の牛角を請ひしを以て、東山北陸等の諸國に命して、之を貢せしむ、

〔續日本紀〕二十三　辛酉、○十遣從五位上上毛野公廣濱、外從五位下廣田連小床、六位已下官六人、造造唐使船四隻於安藝國、仰東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海等道諸國、貢牛角七千八百隻、初高元度自唐歸日、唐帝語之曰、屬祿山亂、雖兵器多亡、今欲作弓、交要牛角、聞道、本國多有牛角、卿歸國、爲求使次相贈、故有此儲焉、

天平寶字八年甲辰　紀元千四百二十四年

九月乙未朔

十二日、丙午、北陸道諸國に命して、太政官の印を用ふることを停む、

〔續日本紀〕二十五　丙午、○十二日高野天皇勅、○中略又北陸道諸國不須承用太政官印、

稱德天皇

天平神護元年乙巳　紀元千四百二十五年

四月壬戌朔

四日、乙丑、越中等の國飢う、之を賑給せしむ、

〔續日本紀〕二十六　乙丑、○日四美濃、越中、能登等國飢、賑給之、

天平神護二年丙午　紀元千四百二十六年

七月甲寅朔

二十二日、乙亥、國見安曇、越中介に任ず、

〔續日本紀〕二十七　乙亥、○二十日從五位下國見眞人安曇爲越中介、

九月甲寅朔

二十三日、丙子、巡察使を五畿六道に遣はして、民の疾苦を問はしむ、豐野出雲は、北陸道使となる、

〔續日本紀〕二十七　丙子、○二十三日以從四位下阿倍朝臣毛人爲五畿內巡察使、○中略中採訪百姓疾苦、判斷前後交替之訟、並撿頃畝損得、

神護景雲元年丁未　紀元千四百二十七年

三月 庚戌朔

二十日、己巳、利波臣志留志、越中員外介に任ず、

〔續日本紀〕二十八　○己巳、十日、二外從五位下利波臣志留志、爲越中員外介、

○志留志の米三千碩を盧舍那佛智識に奉して外從五位下を授けられしと、天平十九年九月二日條に在り、

四月 庚辰朔

二日、辛巳、佐伯御耿、越中守となる、是日、東大寺三綱所に移牒す、

〔大日本古文書〕五

○越中國司牒（藥師院文書大和）

○紙面ニ「越中國印十二」アリ

越中國司牒　東大寺三綱所

民部省符壹紙　公田与寺家田所相諍勘巳狀

牒、件省符依寺家牒而檢領已訖、仍錄狀、付廻使外少初位上生江臣村人、以牒、

天平神護三年四月二日　正七位下行目阿倍小殿朝臣淨足

從正位上行守佐伯宿祢御耿

〔大日本史〕三百八十四　國郡司、越中守欄

佐伯御形　神護景雲元年五月見

五月、己酉朔

七日、乙卯、越中國東大寺墾田地檢校帳成る、

〔大日本古文書〕五

○越中國東大寺墾田地檢校帳（正倉院文書）

（東南院參櫃三十）　○紙面ニ「國印ヲ蹈シタレドモ、色淡クシテ數フ可カラス、」

（裏題）越中國司解　檢校墾田地事　天平神護三年　國印

越中國司解　申檢校東大寺墾田地事

合墾田地柒伯伍拾柒町肆段壹伯壹拾陸歩

見開田肆伯貳拾柒町壹段壹伯貳拾柒歩

奉神壹町玖段壹伯肆拾肆歩

荒捌拾貳町玖段貳伯參拾肆歩

全佃參伯肆拾貳町肆段壹伯玖歩

未開地參伯參拾町參伯肆拾玖歩

礪波郡叁處

井山庄地壹伯貳拾町

見開肆拾柒町捌拾伍歩

神分壹町

全佃肆拾陸町捌拾伍歩

未開柒拾貳町玖段貳伯柒拾伍歩

石粟庄地壹伯壹拾貳町

見開玖拾柒町貳段叁伯叁拾陸歩

神分陸段壹伯肆拾肆歩

荒叁拾貳町貳段叁伯壹拾肆歩

全佃陸拾肆町叁段貳伯叁拾捌歩

未開壹拾肆町柒段貳拾肆歩

杵名蛭庄地叁拾柒町柒段玖拾捌歩

見開叁拾柒町柒段玖拾捌歩

神分壹段

荒壹拾貳町伍段貳伯陸拾陸歩

全佃貳拾伍町壹伯玖拾貳歩

射水郡肆處

桜田庄地壹伯叁拾町捌段壹伯玖拾貳歩

見開肆拾肆町壹伯玖拾貳歩

荒壹拾柒町叁段叁伯貳拾貳歩

全佃貳拾陸町陸段貳伯叁拾歩

未開捌拾陸町捌段

須加庄地叁拾伍町壹段貳伯貳拾肆歩

見開叁拾町捌段柒拾肆歩

神分壹段

荒壹拾陸町叁段玖拾貳歩

全佃壹拾肆町叁段叁伯肆拾貳歩

未開肆町叁段壹伯伍拾歩

成戸庄地伍拾捌町叁段壹拾歩

見開伍拾壹町陸段貳伯壹拾歩

荒肆町叁段叁伯貳拾歩

全佃肆拾柒町貳段貳伯伍拾歩

未開陸町陸段壹伯陸拾歩

鹿田庄地貳拾玖町叁段壹伯歩全佃

神分壹段

芝貳拾玖町貳段壹伯歩

新川郡貳處

丈部庄地捌拾肆町貳伯壹拾貳歩全佃

大荆庄壹伯伍拾町

見開壹拾捌町

未開壹伯叁拾貳町

以前、被太政官去四月九日符偁、被右大臣同月六日宣、奉（吉備眞吉備）勅、在礪波射水新川等叁郡東大寺未開田地肆伯壹拾町叁伯叁拾貳歩、宜便令志閏志撿按者（國カ）夕宜柴知、准勅施行者、謹依符旨、即差員外介從五位上利波臣志閏志充使、撿按如件、仍具

注狀謹解、

天平神護三年五月七日　正七位下行目阿倍小殿朝臣淨足

從五位上行守佐伯宿祢御狄　正六位上行掾若櫻部朝臣粳麻呂

從五位下行介國見眞人安曇　正六位上行員外掾秦忌寸黑人

從五位上行員外介利波臣志閏志　正八位下行員外目阿刀連朝集使

〔參考〕

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中欄、

掾若櫻部粳麻呂神護景雲元年五月見

員外掾秦黑人　神護景雲元年五月見

目阿倍小殿淨足神護景雲元年五月見

員外目阿刀○名神護景雲元年七月見

〔大日本史〕三百四　新川郡○略中領郷十、和名鈔名長谷○按地理志稿云、郡西有志麻今島郷屬邑十八在長江東、長屋長江諸村、蓋其遺名、

天平神護中、爲東大寺封戸、東大寺文書

十一月丁未朔

十六日、壬戌、越中國東大寺墾田野地圖目錄帳成る、

〔大日本古文書〕五

○越中國東大寺墾田野地圖目錄帳（正倉院文書）

（東南院 巻櫃二十九 ○紙四二「越中國印五十三」アリ）

（表）「越中國諸郡庄園惣券第三櫃印 景雲元年」

（裏）「越中國東大寺墾田野地圖目錄帳 神護景雲元年」

越中國司解　申檢校東大寺墾田並野地畠事

合玖伯叁拾肆町捌段壹伯壹拾捌歩

見開田肆伯肆拾陸町壹段貳伯貳拾柒歩

奉（神壹町）□□□段貳伯貳拾肆歩

（川成壹）□□□段貳拾歩

荒壹伯伍町肆段壹伯捌拾陸歩

定叁伯叁拾捌町捌段壹伯伍拾柒歩

（未開）□□地肆伯捌拾捌町陸段貳伯伍拾壹歩

捌卷

礪波郡肆處

合叁伯玖拾捌町貳伯伍拾貳歩

見開（壹伯）□□捌拾伍町貳段叁伯壹拾壹歩

（未神）□□陸段壹伯肆拾肆歩

荒伍拾柒町捌段叁伯壹拾歩

定壹伯貳拾陸町柒段貳伯壹拾柒歩

未開貳伯壹拾貳町柒段叁伯壹歩

井山村地壹伯貳拾町

見開肆拾柒町捌拾伍歩

未開柒拾貳町玖段貳伯柒拾伍歩

伊加留岐村地壹伯町

見開捌段叁伯肆拾歩

未開玖拾玖町壹段貳拾歩

石粟村地壹伯壹拾玖町伍段壹伯玖拾陸歩

見開玖拾伍町貳段壹拾貳歩

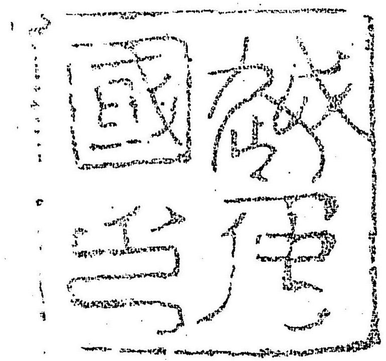
奉神陸段壹伯肆拾肆歩

荒叁拾捌町貳段貳伯伍拾歩
交伍拾陸町貳段叁伯叁拾捌歩
未開貳拾肆町叁段壹伯捌拾肆歩
杵名蛭村地伍拾捌町伍段伍拾陸歩
見開肆拾貳町壹段貳伯叁拾肆歩
荒壹拾玖町陸段陸拾歩
交貳拾貳町伍段壹伯柒拾肆歩
未開壹拾陸町叁段壹伯捌拾貳歩
射水郡肆處
合叁伯貳町柒段壹拾肆歩
見開壹伯陸拾伍町叁段貳伯捌拾陸歩
奉神捌段捌拾歩
川成壹段貳拾歩
荒肆拾柒町伍段貳伯叁拾陸歩
交壹伯壹拾陸町捌段叁伯壹拾歩

未開壹伯叁拾柒町叁段捌拾捌歩
楔田村地壹伯伍拾柒町貳段壹伯陸拾歩
見開伍拾叁町陸段貳伯貳拾歩
奉神陸段
荒貳拾肆町貳伯柒拾歩
交貳拾捌町玖段叁伯壹拾歩
未開壹伯叁町伍段叁伯歩
須加村地伍拾陸町柒段貳伯玖拾肆歩
見開叁拾柒町肆段壹伯捌拾陸歩
奉神壹段捌拾歩
荒貳拾貳町柒段陸拾陸歩
交壹拾肆町陸段肆拾歩
未開壹拾玖町叁段壹伯捌歩
鳴戸村地伍拾捌町叁段貳伯陸拾歩
見開伍拾壹町肆段肆拾歩

川成壹段貳拾歩
荒柴段貳伯陸拾歩
之伍拾町伍段壹伯貳拾貳歩
未開陸町玖段貳伯貳拾歩
鹿田村地叁拾町叁段貳拾歩
見開貳拾貳町捌段貳伯歩
奉神壹段
之貳拾貳町柴段貳伯歩
未開柴町肆段壹伯捌拾歩
新川郡貳處
合貳伯叁拾肆町貳伯壹拾貳歩
見開玖拾伍町肆段叁伯伍拾歩
奉神叁段
之玖拾伍町壹段叁伯伍拾歩
未開壹壹(行ノ)伯叁拾捌町伍段貳伯貳拾貳歩

國印



神護景雲元年十一月十六日越中國東大寺
銀田野地圖目録帳所捺
東南院第三櫃第廿九卷

川成壹段貳拾歩

[illegible]壹段貳伯陸拾歩

[illegible]拾町弐段壹伯壹拾歩

[illegible]町弐段貳伯貳拾歩

[illegible]地壹拾町参段貳拾歩

見開貳拾貳町捌段貳伯歩

本神壹段

[illegible]貳拾貳町壱段貳伯歩

[illegible]町肆段壹伯捌拾歩

新川郡貳箇

合貳伯参拾肆町貳伯壹拾貳歩

見開玖拾伍町肆段参伯伍拾歩

奉神参段

[illegible]玖拾伍町壹段参伯伍拾歩

[illegible]参拾捌町伍段貳伯貳拾貳歩

越仲
國印

越仲國印

神護景雲元年十一月十六日越中國東大寺
銀田野地圖目録帳所捺
東南院第三櫃第廿九卷

大荆村地壹伯伍拾町

見開壹拾玖町壹段陸拾歩

未開壹伯叁拾町捌段叁伯歩

丈部村地捌拾肆町貳伯壹拾貳歩

見開柒拾陸町叁段貳伯玖拾歩

奉神叁段

宍柒拾陸町陸段貳伯玖拾歩

未開柒町陸段貳伯捌拾貳歩

以前、撿校東大寺墾田野地並畠、具件如前、仍具錄狀、附利波臣淨貞進上、謹解、

神護景雲元年十一月十六日　正七位上行目阿倍小殿朝臣調使

從五位上行守佐伯宿祢朝臣使　正六位上行掾若櫻部朝臣糠麻呂

從五位下行介國見真人安曇　正六位上行員外掾秦忌寸黑人

從五位上行員外介利波臣志留志　正八位上行員外目阿刀連在京

（別筆）「右件田畠、付淨人淨濱、送上三經所

景雲二年九月九日主典建部廣足

越中等、諸國の乘田を、四天王寺に捨入す

〔續日本紀〕二十八　十一月壬寅、四天王寺墾田二百五十町、在播磨國佃磨郡、去戊申年收班給百姓口分田而未入其代、至是、以大和、山背、攝津、越中、播磨、美作等國乘田及沒官田捨入、

〔續日本紀考證〕九　十一月壬寅、是月丁未朔、無壬寅、內藤氏曰、推干支、十月廿六日壬寅、廿九日乙巳、今皆置是月、蓋錯簡也、元融曰、依下文去戊申年之文、此條疑當在二年以後、

神護景雲二年戊申　紀元千四百二十八年

閏六月癸卯朔

三日、乙巳、甘南備伊香、越中守に任す、

〔續日本紀〕二十九　乙巳、日〇三從五位上甘南備眞人伊香爲越中守、

光仁天皇

少判官志斐連麻呂

寶龜元年庚戌　紀元千四百三十年

十二月己丑朔

二十八日、丙辰、皇甫東朝、越中介に任す、

〔續日本紀〕三十　丙辰、〇二十八日從五位上皇甫東朝爲越中介、

寶龜三年壬子　紀元千四百三十二年

四月辛亥朔

二十七日、丁丑、石川眞守、越中守に任す、

〔續日本紀〕三十　丁丑、〇二十七日從五位上石川朝臣眞守、爲越中守、

〔公卿補任〕　參議從四位下石川眞守、六十、天平神護二年七月從五位下、爲近江介、（廿七）三年七月庚戌右京亮、神護景雲二年十一月癸未中務少輔、四年九月乙亥少納言、寶龜二年十二月一日從五位上、三年四月庚午遠江守、丁丑越中守、七年三月癸巳中務少輔、丙申式部少輔、十一年正月癸酉正五位下、天應元年五月癸未兼武藏守、少輔如元、延曆元年八月乙亥式部大輔守如元、二年正月癸巳正五位上、五月辛卯從四位下、任太宰大貳、九年二月廿七日任參議、七月任右大辨、〇延曆九年の條

〔大日本史〕三百八十四　國郡司、越中欄

大領○郡名閑利波眞公寶龜二年七月見

寶龜五年甲寅　紀元千四百四十年　朔庚子

三月

五日、甲辰、牟都伎王、越中介に任す、

〔續日本紀〕三十三　甲辰、○五日、從五位下牟都伎王爲越中介、

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中關

員外介藤原長繼寶龜二年七月見

介牟都伎王　寶龜五年三月任

寶龜六年乙卯　紀元千四百五十年　朔甲午

三月

二日、乙未、始めて越中國に大少目員を置く、

〔續日本紀〕三十三　三月乙未、日○二、始置伊勢少目二員、參河大少目員、遠江少目二員、駿河大少目員、武藏、下總少目二員、常陸少掾二員、少目二員、美濃少目二員、下野大少目員、陸奥、越前少目二員、越中、但馬、因幡、伯耆、大少目員、

○越中に大目少目ありしかと、天平及び天平勝寶年間に見ゆ、天平十八年六月二十一日家持越中守とある條參看すべし、

寶龜七年丙辰　紀元千四百六十年　朔戊子

三月

六日、癸巳、牟都伎王、越中守に、小治田諸成、越中介に任す、

〔續日本紀〕三十四　癸巳、日○六、從五位下牟都伎王爲越中守、從五位下小治田朝臣諸成爲介、

寶龜八年丁巳　紀元千四百七十年　朔己卯

十月

十三日、辛卯、安倍笠成、越中守に任す、

〔續日本紀〕三十四　辛卯、○十三日、從五位下安倍朝臣笠成、爲越中守、

寶龜九年戊午　紀元千四百八十年　朔戊寅

二月

二十三日、庚子、紀宮人、越中介に任す、

〔續日本紀〕三十五　庚子、○二十三日、從五位下紀朝臣宮人、爲越中介、

〔參考〕

〔大日本史〕 三百八十四 國郡司、越中欄

介紀宮人寶龜九年二月任、

八月 甲戌 朔

二十日、癸巳、路石成、越中介に任す、

〔續日本紀〕 三十五 癸巳、○二十日、從五位下路眞人石成、爲越中介、

寶龜十一年庚申 紀元千四百四十年

五月 甲子 朔

十四日、丁丑、越中・越後等諸國をして、糒を貯へて機要に備へしむ、

〔續日本紀〕 三十六 丁丑、○十四日、勅曰、機要之備、不可闕乏、宜仰坂東諸國、及能登、越中、越後、令備糒三万斛、炊曝有數、勿致損失、

七月 癸亥 朔

二十六日、戊子、北陸道緣海をして、大宰に准し、賊船の來襲に備へしむ、

〔續日本紀〕 三十六 戊子、○二十六日、勅曰、筑紫太宰僻居西海、諸蕃朝貢舟檝相望、由是簡練士馬、精鋭甲兵、以示威武、以備非常、今北陸道亦供蕃客、所有軍兵、未曾教習、屬事微發、全無堪用、安必思危、豈合如此、宜准大宰依式警虞、須緣海村邑見賊來過者、

當即差使速申於國、國知賊船者、長官以下急向國衙、應事集議、令管內警虞、且行且奏、其一賊船率來着我邊岸者、當界百姓執隨身兵、并賫私糧、走赴要處、致死相戰、必待救兵、勿作逗留、令賊乘間、其二軍所集處、預立標榜、宜量地勢、務得便宜、兵士已上、及百姓便弓馬者、量程遠近、結隊分配、不得臨事彼此雜亂、其三戰士已上、明知賊來者、執隨身兵、兼佩館戟、發所在處、直赴本軍、各作軍名、排比隊伍、以靜待動、乘逸擊勞、其四應機赴軍國司已上、皆乘私馬、若不足者、即以驛傳馬充之、其五兵士白丁赴軍、及待進止、應給公粮者、計自起家五日、乃給、其閑處者給米、要處者給糒、其六

寶龜十一年庚申 紀元千四百四十年 朔

十二月 辛卯 朔

十四日、甲辰、射水郡二上神・礪波郡高瀨神は、並に從五位下に叙す、

〔續日本紀〕 三十六 甲辰、○十四日、越前國丹生郡大虫神、越中國射水郡二上神、礪波郡高瀨神、並叙從五位下、

○延暦十四年八月、承和七年九月、齊衡元年三月、貞觀元年正月に、神階を加ふ、各本條あり、

〔參考〕

〔延喜式〕十 神名帳　越中國礪波郡高瀬神社、
越中國射水郡射水神社、

〔諸國神名帳〕五　高瀬神社、卜部說云、與能登國氣多社同躰也、氣多神者大物主命也、

〔神名帳考證〕六　射水神社　大河音宿禰命、國造本紀云、伊彌頭國造、建内足尼孫大河音足尼定賜、三代實錄云、仁和二年十二月十八日、壬戌、越中國新川郡擬大領正七位上伊彌頭臣貞益授借外從五位下、新校云、萬葉集二上山在射水郡二上神若射水神社乎、
高瀬神社　今在高瀬村雄神川之西也、

〔一宮巡詣記〕七　元祿九年七月十一日、二上權現と越中の一宮のよゝ云ものあるゝど、心もとなくて二上社内養老寺へ參る、緣起を見侍る、本社二座奥院山中に一座瓊々杵尊、出見尊、葺不合尊と云、是日向國二上峯を移せる社也、所のもの大和國當麻二上の峯を移せと云ものあるは非也、

〔神社覈錄〕三十 九　射水神社名神大　祭神詳からも、二上山嶺ふ在も、土人說、古今二上明神と稱も、

高瀬神社　祭神天活玉命、大巳貴命、五丁十猛命、神社帳
明治四年五月十四日、被列於國幣中社、所在富山縣越中國射水郡高岡市高岡定塚町、祭神記云、大巳貴神、

〔越の下草〕一　高瀬神社　礪波郡高瀬村にあり、
式内礪波郡七社の第一也、往古は越中の一宮なりといふ、古來里人傳へて云、此御神は往古高麗より御渡り、此地に御着の日、七月十四日なりと、御神御足袋を濕せ給ふ流をたび川と名づけ、此川の邊に暫時御休み、高瀬へ御移の間、俄ふ雨降、御神雨をくゝると仰せられ〜と也、よつて、其處を今に雨潛野村といふ也、其後毎年たび川の邊御休の處へ御旅なされ、其處を宮守と唱へ、今に江田村領に舊跡あり、たび川も江田村領を流る也、又高瀬村に鎌倉といふ舞大夫居住す、此先祖は御神高麗より御渡の時供奉し來る者にて、元は禰宜大夫なるに、神社廢墟の後舞大夫と成、今更鎌倉を名に唱へ、子孫あり、

〔越中志〕四 射水郡下　森山、本ノ名ハ二上山ナリ、山上ニ二上神社アリ、社邊ニ池ナトアリト云、麓ニ木葉ノ里、紅葉川アリ、

〔大日本史〕二百五十九 神祇志、神祇、越中

礪波郡七座◎六座略す

高瀬神社、又稱氣多社、參取白山記、神名帳頭注、一宮記、類聚既驗鈔、○今在高瀬郷高瀬村、相傳、遷祀能登氣多神、參取白山記、諸社根元記、諸神記、○神名帳頭注、寶龜十一年、叙從五位下、續日本紀、延暦十四年、加從五位上、日本紀略、承和七年、自從四位下、進從四位上、後紀、齊衡元年、加從三位、文德實錄、貞觀元年、至正三位、三代實錄、後稱本國一宮、類聚既驗鈔、一宮記、○按白山記、氣多社、實本國一宮、在能登郡、神龜中、割爲二國、以一宮屬焉、更以二宮二上社爲本國一宮、後遷祀氣多神于本社、號新氣多、與二上爭爲一宮、遂以本社爲一宮、此說雖不可憑、而本社爲一宮、蓋亦久矣、諸神根元鈔以射水郡氣多社爲一宮、惡以二宮亦誤、同名致誤、神道集以立山神爲一宮、

射水郡十三座○十二座略

射水神社、又曰二上神、續日本紀、以下國史、諸神根元鈔、諸社根元記、○今在二上莊二上山麓二上村谷内之地、稱二上明神、蓋祀伊彌頭國造祖、類聚本紀、三代實錄、延喜式、寶龜十一年、叙從五位下、續日本紀、延暦十四年、加從五位上、日本紀略、承和七年、自從四位下、進從四位上、後紀、齊衡元年、加從三位、文德實錄、貞觀元年、至正三位、三代實錄、延喜制、列名神大社、延喜式、而諸社○按本書、脫名神大三字、今據一本紀、以之充氣多社者誤、○延暦十四年以下の加叙は各、本條あり、

〔萬葉集古義〕十七下天　二上山賦一首此山者、在射水郡也、◎註略す、

伊美都河泊、伊由伎米具禮流、多麻久之氣布、多我美山者、波流波奈乃、佐氣流左加利爾、安吉乃葉、乃爾保弊流等伎爾、出立底布里佐氣見禮婆、可牟加良夜、曾許婆多敗刀伎、夜麻可良夜、見我保之加良吉乃安里蘇爾、阿佐奈藝爾、餘須流之良奈美、由敗奈藝爾、美知久流之保能、伊夜麻之之爾、多由流許登奈久、伊爾之弊由、伊麻乃乎都、豆爾、可久之許曾、見流比登其等爾、加氣底之努波米◎註略す、下此に倣ふ、之夫多爾能、佐伎能、安里蘇爾、與須流奈美、伊夜思久思久爾、伊爾之弊於毛保由多麻久之氣、敗多我美也麻爾、鳴鳥能、許悪乃孤悲思吉、登岐波伎爾家里、

右三月三十日、依興作之、大伴宿禰家持

桓武天皇

延暦元年壬戌　紀元千四百四十二年

閏正月甲申朔

十七日、庚子、中宮少進物部國足をして、越中介を兼ねしむ、

〈續日本紀〉三十七、庚子、〇十日中宮少進、外從五位下、物部多藝宿禰國足爲兼越中介、

延暦二年癸亥　紀元千四百十三年　朔戊申

二月

二十五日、壬申、調使王、越中守に任す、

〈續日本紀〉三十七　壬申、〇五日、二十從五位上調使王爲越中守、

〈大日本史〉三百八十四國郡司、越中欄

掾藤原眞繼　延暦二年六月見

大目平羣清足　延暦二年六月見

擬大領名〇郡闕利波大田　延暦二年六月見

延暦四年乙丑　紀元千四百十五年　朔丁酉

正月

十五日、辛亥、佐伯鷹守、越中介に任す、

〈續日本紀〉三十八　辛亥、〇五日、十從五位下佐伯宿禰鷹守爲越中介、

延暦六年丁卯　紀元千四百十七年

二月　朔丙辰

五日、庚申、紀馬守、越中守に任す、

〈續日本紀〉三十九　庚申、〇五日、從五位下紀朝臣馬守爲越中守、

延暦七年戊辰　紀元千四百十八年　朔己酉

三月

二日、庚戌、蝦夷を征せんかため、北陸等諸國に命して糒・鹽を陸奥國に運はしむ、

〈續日本紀〉九三十　三月庚戌、〇二日、軍粮三万五千餘斛仰下陸奥國運收多賀城、又糒二万三千餘斛並鹽仰東海、東山、北陸等國限七月以前轉運陸奥國、並爲來年征蝦夷也、

延暦八年己巳　紀元千四百十九年　朔甲戌

二月

四日、丁丑、大判事橘綿裳をして、越中介を兼ねしむ、

〈續日本紀〉四十　丁丑、〇四日、大判事、從五位上橘朝臣綿裳爲兼越中介、

六月　朔壬申

藤原應養は越中守たり、

〔大日本史〕三百八十四　國郡司、越中守欄

藤原應養延暦十年六月見、弘仁三年正月重任、六年月卒

〔大日本史〕三百八十四　國郡司、越中欄

大目豐津人成延暦十年六月見

延暦十年幸未　紀元千四百五十一年

六月　庚寅朔

五日、甲午、石浦王、越中守に任ず、

〔續日本紀〕四十　甲午、○五日、從五位下石浦王爲越中守、

延暦十一年壬申　紀元千四百五十二年

六月　甲申朔

十四日、丁酉、越中國等の健兒をして兵庫・鈴藏及び國府を守衛せしむ、

〔類聚三代格〕十八

健兒事

太政官符

應差健兒事

大和國卅人○略　中　越中國五十人○略　中

以前被右大臣(藤原繼繩)宣�palette、奉勅今諸國兵士、除邊要地之外皆從停廢、其兵庫鈴藏及國府等類、宜差健兒以宛守衛、宜簡差郡司子弟、作番令守、

延暦十一年六月十四日

延暦十二年癸酉　紀元千四百五十三年

六月　戊申朔

二十三日、庚午、諸國に命して新宮の諸門を造らしむ、若狹越中は安嘉門を造る、

〔拾芥抄〕中末　宮城部第十九

或書云、暦延○延暦の誤十二年正月甲午、遣使於山背國葛野宇太村、爲遷都也、始造山背新宮、同年六月庚午、三日○二十令諸國造新宮諸門、尾張、美濃二國造殷富門、伊福部氏也、越前國造美福門、壬生氏也、若狹、越中二國造安嘉門、海犬甘氏也、丹波國造偉鑒門、猪使氏也、但馬國造藻壁門、佐伯氏也、播磨國造待賢門、山氏也、備前國造陽明門、若犬甘氏也、備中備後二國造達智門、丹治氏也、阿波國造談天門、玉手氏也、伊與

國造祁芳門、達部氏也、同十三年冬十月廿三日、天皇自南京遷北京、

延曆十四年乙亥　紀元千四百五十五年

八月　乙丑朔

十八日、壬午、高瀨神・雄神・二上神、並に從五位上に叙す、

〔日本逸史〕四　壬午、八日越中國高瀨神・雄神・二上神、並叙從五位上、日本紀略

○高瀨二上二神の事は、寶龜十一年十二月十四日條に見ゆ、又雄神の加敍は、貞觀十二年五月廿九日、元慶三年十月廿九日に在り、

〔參考〕

〔延喜式〕十、神名　越中國礪波郡雄神神社、

〔諸國神名帳〕五　雄神社、伊弉諾尊也、

〔神名帳考證〕六　雄神神社　今在庄村川東也、霧神　河伯神霧乎、萬葉集云、礪波郡雄神河邊作歌乎加未河伯、久禮奈爲爾保布、乎等賣良之葦附水松之類等流登、湍爾多々須、

〔神社覈錄〕三十九　雄神神社　雄神は袁加美と訓むべし、祭神高靈開靈開罔象、

〔神祇帳〕同上、庄金剛寺村ゟ在も上、

〔大日本史〕二百五十九、神祇志、神社、越中　礪波郡七座、六座略

雄神神社○一無一神字、今在二莊下郷莊一、金剛寺村雄神川東、正百劵山、延曆十四年、授二從五位上一、日本紀略、貞觀五年、自二正五位下一進二正五位上一、○本書此條作二雄山神一、然推二前後位階一、爲二十二年又加一階一、元慶三年、至二從四位上一、三代實錄、此神明矣、且神階記作二雄神一、故係二于此一、

〔三州志〕二、雜錄餘考　御河端、土人相傳フ、越中庄川ノ古名ヲ雄神川ト云、古ヘ此河流二十町許ノ間、雄神社ノ神供料ニ他ノ殺生ヲ禁ズ、是ヲ御川端ト呼タルナリ、

延曆十八年己卯　紀元千四百五十九年

正月　丙午朔

二十九日、甲戌、石淵王、越中守に、村國息繼、越中介に任す、

〔日本後紀〕八　甲戌、九日、二十從五位上石淵王、爲二越中守一、外從五位下村國連息繼、爲介、

六月　甲戌朔

二十五日、戊戌、越中國飢う、使を遣はして賑給せしむ、

〔日本後紀〕八　戊戌、〇二十、越中國飢、遣使賑給、

延暦二十一年壬午　紀元千四百六十二年

九月乙卯朔

三日、丁巳、越中等三十一國の損田の租稅を免し、調を徵す、

〔類聚國史〕八十三　政理部五、免租稅　九月丁巳、伊賀・伊勢・尾張・參河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・武藏・上總・下總・常陸・近江・美濃・上野・下野・越前・越中・能登・越後・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・周防・長門・伊豫・土佐等卅一國、損田百姓、免租稅、徵調、

延暦二十三年甲申　紀元千四百六十四年

正月丁丑朔

二十四日、庚子、藤原山人、越中權介に任ず、

〔日本後紀〕十二　庚子、〇二十四日、從五位下藤原朝臣山人爲越中權介、

六月甲辰朔

十日、癸丑、越中國を上國と定む、

〔日本後紀〕十二　癸丑、〇十、定越中國爲上國、

延暦二十四年乙酉　紀元千四百六十五年

五月己巳朔

二十六日、甲午、越中國飢う、使を遣はして賑給せしむ、

〔日本後紀〕十二　甲午、〇二十日、甲斐・越中・石見三國飢、遣使賑給、

十二月丙申朔

七日、壬寅、越中國等の庸を免す、

〔日本後紀〕十三　壬寅、〇七、公卿奏議曰、伏奉綸旨、營造未已、黎民或弊、念彼勤勞、事須矜恤、加以時遭災疫、頗損農桑、今雖有年、未聞復業、宜量事優矜、得存濟者、臣等商量、〇中略又、伊賀・伊勢・尾張・近江・美濃・若狹・越前・越中・丹波・丹後・但馬・因幡・播磨・美作・備前・備中・備後・紀伊・阿波・讃岐・伊豫等國殊免當年庸、許之、

平城天皇

大同元年丙戌　紀元千四百六十六年

五月甲子朔

二十四日、丁亥、始めて六道觀察使を置き、參議秋篠安人、北陸道觀察使となる、

〔日本逸史〕十五　丁亥、○二十四日、始置六道觀察使、日本紀略、○下文、公卿補任に引用す、今略す、

〔公卿補任〕參議從四位上秋篠安人、五十　右大辨勘長官、近衛少將、阿波守、四月十五日從四位上、十八日右中將、五月十九日兼春宮大夫、廿四日停參木爲北陸道觀察使、七月十四日轉左大辨、○大同元年の條、

〔參考〕

〔公卿補任〕平城大同二年　丁亥　四月十六日、詔宣罷參議號、獨置觀察使、所食封邑各二百戶、

北陸道觀察使從四位上秋篠安人、五十六　四月十六日停參議號、八月十四日兼侍從、十一月十一日坐伊與親王事、左遷造西寺長官、他官皆停、(左大辨、近衛中將、春宮大夫、)○大同二年の條、

大同三年戊子　紀元千四百六十八年　四月　癸丑　朔

山陽道觀察使藤原園人をして、北陸道の事を攝行せしむ、

〔公卿補任〕

山陽道觀察使正四位下藤原園人、五十四、勳二等、六月廿五日任山陽道觀察使、兼民部卿、皇太子傅如元、四月攝行北陸道事、○大同三年の條、

大同四年己丑　紀元千四百六十九年　四月　丙子　朔

十三日、戊子、藤原仲成、北陸道觀察使に任ず、

〔公卿補任〕

北陸道觀察使從四位上藤原仲成、三十七　四月十三日任北陸道觀察使、同月兼常陸守、五月任右兵衛督、六月兼大藏卿、○大同四年の條、

嵯峨天皇

弘仁元年庚寅　紀元千四百七十年　五月　庚子　朔

二十七日、丙寅、渤海使首領高多佛を越中國に置き、史生・習語生等をして、就き

て、渤海語を習はしむ、

〔日本紀略〕前篇十四　丙寅、○二十七日、渤海使首領高多佛脫身留越前國、安置越中國、給食、即令史生羽栗馬長、幷習語生等就習渤海語、

弘仁三年壬辰　紀元千四百七十二年

五月　庚申朔

十二日、辛巳、藤原鷹養、再ひ越中守に任す、

〔日本後紀〕二十　辛未、○十二日、從五位上藤原朝臣鷹養爲越中守、

〔大日本史〕三百八十四　國郡司、越中欄

掾板井御笠丸大同二年九月見

少目滋野馬澤大同二年　月見

大目滋野繼長大同三年七月見

權掾名草道主大同三年十二月任、

擬大領○郡名闕利波田人大同二年九月見、

擬少領○郡名闕利波豐成大同二年九月見、尋歷擬大領、弘仁中爲少領、

擬主政○郡名闕中臣家成大同三年七月見、

五月　戊午朔

二十八日、乙酉、越中國の講師をして、能登國の諸寺を檢校せしむ、

〔類聚國史〕百八十佛道部七　嵯峨天皇弘仁三年五月乙酉、令河內國講師便檢校和泉國部內之定額諸寺、又上總國檢校安房國之諸寺、越中國檢校能登國之諸寺、爲元來不置講師也、

〔參考〕

〔萬葉集古義〕十八上天　詠庭中牛蒡花歌一首略す、◎註

比登母等能奈泥之故宇惠之曾能許己呂多禮爾見世牟等於母比曾米家牟、略す、◎註

右、先國師從僧清見、可入京師、因設飲饌饗宴、于時主人大伴宿禰家持、作此歌詞、

送酒清見也、

國師は、越中國師なり、續紀に、大寶二年二月丁巳、任諸國國師、延曆二年冬十月庚戌、治部省言云々、大上國各任大國師一人、少國師一人、中下國各任國師一人、計之、類聚三代格に、弘仁十三年三月辛亥、太政官符云々、至于延曆十年、改國師、稱講師云々、○清見は傳未詳なれども、○可ノ字は欲の誤にやと契沖いへり、○因ノ字或本に日と作り、○送酒いふなるべしといへり、遊仙窟に、兒與少府公送酒、

〔萬葉集古義〕十九中天　見攀折保寶葉歌二首略す、◎註

吾勢故我、捧而持流、保寶我之婆、安多可毛似加、青蓋、

講師僧惠行

講師、玄蕃式に、凡諸國講師、擇二年四十五以上、讀師、四十已上者補之、但雖臘滿之類、而年限未及、不可擬補、また凡延暦寺の三綱一任之後、任諸國の講讀師、其の上座、寺主、都維那、任講師、都維那、任讀師、とある、三綱とは、上座寺主、都維那なり、延暦寺、并に諸大寺の三綱は、諸國の講讀師に任れしと見ゆ、諸國とは、諸國の國分寺なり、これ各々國の僧尼をつかさどる寺なり、委しきことは、玄蕃式を考ふべし、○僧寺の行事、未詳ならず、◎本註の前文は略す、

皇祖神之遠御代三世波、射布折酒飲等伊布曾、此保寶、我之波、

守大伴宿禰家持◎註略す、

弘仁四年癸巳　紀元千四百七十三年

二月　甲申朔

十三日、丙申、家繼、越中權介に任す、

〔日本後紀〕二十　丙申、○十三日外從五下綾連家繼爲越中權介、

弘仁五年甲午　紀元千四百七十四年

十二月　癸卯朔

二日、甲辰、登美藤津、越中守に任す、

〔日本後紀〕二十　甲辰、○二從五位上登美眞人藤津、爲越中守、

弘仁六年乙未　紀元千四百七十五年

正月　癸酉朔

十日、壬午、安倍雄能麻呂、左馬頭兼越中介に任す、

〔日本後紀〕二十　壬午、○十從五位上安倍朝臣雄能麻呂、爲左馬頭兼越中介、

〔參考〕

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中關

介安倍雄能麻呂弘仁六年正月任尊卑上野守

二月　癸卯朔

九日、辛亥、越中介大伴黑成、掾多治比清雄等、官物を盜みしを以て官を免す、守藤原朦養・大目上村主乎加豆良既に卒せしを以て其罪を問はず、

〔日本後紀〕二十　辛亥、○九日越中國介正六位上大伴宿禰黑成、掾正六位上多治比眞人清雄、少目從七位下和邇部臣眞嗣等免、以盜官物也、其守從五位上藤原朝臣朦養、大目正六位上上村主乎加豆良、以身卒死、勿論其罪、

弘仁十四年癸卯　紀元千四百八十三年

六月　甲申朔

二十三日、丙午、和氣眞綱、越中守に任す、